

2019年度 近畿ESDコンソーシアム
第3回集まれ！ESD子ども広場
活動報告書



2020年3月

国立大学法人奈良教育大学

地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の
養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

今年もがんばりました

奈良教育大学 中澤 静男

第3回集まれ！ESD子ども広場はムクロジを使った洗濯体験とシャボン玉体験という、自然環境と親しむ体験と人と一緒にやると楽しいという、2つの体験が織り込まれていました。さらにスタッフとして関わった学生の皆さんは、ボランティア活動という利他的行動を経験することにもなりました。



2005年にユネスコがESD国際実施計画案を発表しており、その中にESDで育てるべき価値観の基礎として4つが示されています。①世代間の公正の尊重、②世代内の公正の尊重、③自然環境や生態系の保全の尊重、④人権・文化の尊重、です。そしてどのような学びをすることで、この4つを育てることができるかを、ずーっと考えてきて、次の3つに決めました。①利他的行動を経験する、②自然との交歓を経験する（自然の中での活動の経験）、③人との交歓の経験（人と一緒に行動して楽しい）、です。第3回集まれ！ESD子ども広場の内容は、参加してくれた幼児や児童には、②と③が、スタッフとして関わった学生の皆さんには、①・②・③を体験できたと思います。でも、やりっ放しでは学びが少ない。振り返りを行い、テキスト化することで、頭の中の印象が整理され、体験を経験にすることができます。この報告書作成にはそういう意味があります。執筆してくれたみなさん、ありがとう。

今年是他にもうれしいことが色々ありました。まず、昨年度から取り組んでくれた、岡山での被災地復興支援ボランティアが認められ、ガールスカウト日本連盟からコミュニティー・アクションアワード100のチャレンジ賞を、財団法人学生サポートセンターからは第17回学生ボランティア団体表彰を受けました。学生ボランティア団体表彰式に出席したところ、多くのボランティア活動の中から3つが特に素晴らしい活動として紹介されましたが、その2つ目に奈良教育大学のユネスコクラブが紹介され、びっくりしました。

また、みなさんの先輩である、修士課程英語教育専修2回生の谷垣徹君が、「学長表彰」に選ばれました。受賞理由は「UNESCO Youth Forumへ日本代表として参加」したことです。ユネスコクラブができて9年目にして初めての学生表彰です。立派です。

ESDを学んだ人は、SDGsの達成に貢献する活動に取り組むようになる、と考えています。ボランティア活動は利他的行動であり、その活動内容によってSDGsのどこかの目標やターゲットに位置づきます。次年度も、ユネスコクラブが中心になって、ESDティーチャープログラムの学生や、その他多くの本学の学生、他大学の学生を巻き込んだ、学生らしく元気があってアイデア満載の活動を期待しています。

近畿 ESD コンソーシアム 第3回「集まれ！ESD 子ども広場」実施報告書

社会科教育専修3回生 仲村 幸奈

1. 目的

奈良教育大学では、『地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』の一環として、奈良市内のユネスコスクールに通う小中学生を対象とした、ESD を体験的に学ぶ1泊2日の宿泊活動として、「ESD 子どもキャンプ」をこれまでに6回実施してきた。平成30年度からは、近畿 ESD コンソーシアム事業として、日帰りで ESD を体験的に学ぶ「集まれ！ESD 子ども広場」を実施している。

また、本事業の目的は次の二つである。

- (1) ESD（持続可能な開発のための教育）を楽しく体験的に学び合う。
- (2) 子どもと関わる活動を通して、教員を目指す上で必要な資質・能力を身につける。

2. 開催日 令和元年11月17日（日）

3. 開催場所 奈良教育大学キャンパス内及び奈良公園周辺

4. 参加者 奈良市内や京都府の小学校に通う児童（3年生～6年生）11名
奈良市内や京都府の幼稚園等に通う幼児 7名
大学生。大学院生 47名
教職員 3人

5. テーマ 「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」

6・日程

【小学生】

時間	活動
8：30	参加者受付開始
9：00～10：00	オリエンテーション ・アイスブレイキング・班活動の時間・テーマソング練習
10：15～12：15	フィールドワーク
12：15～12：50	昼食
12：50～14：00	昔の生活体験（洗濯）
14：00～15：00	幼児と遊ぼう
15：10～16：05	ESD 勉強会
16：15～16：45	さよならの集い
16：45	解散

【幼児】

時間	活動
13:00	参加者受付開始
13:15～13:30	オリエンテーション（ペープサート） ・アイスブレイキング
13:30～13:45	ポシエット作り
14:00～15:00	小学生と遊ぼう
15:15～15:30	さよならの集い
15:30	解散

7. 参加学生の役割分担

（企画班）

◎：代表

実行委員会	◎西條	○山本	谷垣	仲村	後藤	久保
オリエンテーション	◎下垣内	坂本	岡本(英)	市川	柳川	
フィールドワーク	◎狗飼	奥田	長滝谷	氏家	チャ スンフン	
昔の生活体験	◎桑田	伊藤	種瀬	稲原	南方	
幼稚園児交流	◎畑下	櫛	林	井原	山口(春)	

（当日）

◎：代表

運営班		◎西條	山本(健)	仲村	後藤	久保	下原
		櫛	奥田	種瀬	畑下	狗飼	岡本(英)
		桑田	林	稲原	井原	氏家	岡本(真)
		加藤	木村	熊野	小林	阪中	住釜
		辻	長滝谷	根本	南方	山口(竜)	山口(春)
		山本(幸)	チャ スンフン				
活動班	1班	◎坂本	野村	橋本			
	2班	◎下垣内	稲富	佐藤			
	3班	◎伊藤	市川	内山			
	幼児班	桑垣	福井	福永	横大路	松村	

8. 活動の概要

【小学生】

(1) オリエンテーション

オリエンテーションでは、今日初めて出会った友達と親睦を深め、そして緊張をほぐす目的の元、いくつかのアイスブレイキングを行った。アイスブレイキングでは、後のプログラムで行われる洗濯体験に繋がるような展開構成になっており、子どもたちに楽しく簡単に昔の暮ら

しを伝えることができた。アイスブレイキングの後には、班活動の時間を設け、班のコールや子どもリーダーなどを決めた。これには、活動班の仲を深め、士気を高める役割があった。個性溢れる班のコールがたくさんあり、非常に面白かった。また、声を出す班コールを決め、発表したことにより子どもたちの大きな声を聞くこともできた。最後には、テーマソング練習を行った。去年の本イベントにも来てくれていた子どもが一人おり、「知っている」と言って先頭を切って歌ってくれていた。非常に嬉しかった。



時代を超えた洗濯の仕方を知る

(2) フィールドワーク

奈良公園にある自然を実際に自分の目で見て肌で感じることで、自然に興味を持ってもらおうという目的でネイチャーゲームを行った。導入でも学生が YouTuber になりきり、フィールドワークを進めていくなどと子どもたちの身近を意識した構成になっていた。ゲームの内容としては「?ボックス」に入った植物を手で触り、その植物が何の植物なのかを実際に探すというものである。子どもたちは、班内で絵を描くなどして触った植物が何なのか予想を立て探しに出ている。見つけたときは嬉しそうに他の人にアピールしたり、たくさん拾ったりなどと自然の中で楽しむ子どもの様子を見ることができた。また、次の企画「昔の生活体験」に繋げるために、最後ムクロジに焦点を当てゲームを行った。この後、そのムクロジがどうなるのか子どもたちは不思議な様子だった。次の企画に上手く繋げることができた。



植物についての説明を聞きメモを取る子どもたち

(3) 昔の生活体験

フィールドワークで学んで持って帰ってきた「ムクロジ」を使って、洗濯体験を行った。ムクロジは昔、洗剤として使われており、自分たちで作ったムクロジの洗剤で「洗濯板と洗濯桶」を使って、汚いタオルを洗濯した。日ごろ、家では洗濯機を使って一瞬で終わっていた工程が、洗濯機がなければいかに大変なものを体験した。最初は、「楽しい」と一生懸命綺麗にしようとして洗っていた子どもたちも、「疲れてきた」などと大変さを感じていた。



一生懸命洗濯板を使って洗濯する様子

また、ただ洗うのではなく、「昔の良いところ」や「今の問題点」などについても考えながら体験してもらうことで、次の ESD 勉強会に繋がるように取り組んだ。

(4) 幼児と遊ぼう

今まで別行動を行っていた幼児とここで交流を行った。幼児が多目的ホール内に入ってくると、小学生は自分の班のお友達の名前を大きな声で呼び優しく迎え入っていた。初めに、アイスブレイキングを行い、幼児との交流を図った。そして、幼児から小学生のお兄さんお姉さんに、自分たちが作ってきた「ポシェット」を自慢し、作り方を幼児が教えながら一緒に制作した。最後に、全員でムクロジを使ったシャボン玉を行った。小学生が幼児の手をひく姿や、なかなかシャボン玉が上手くいかない幼児に吹き方などを教えている姿を見ることができた。お互いに今日学んできたことを、伝え合える非常に良い時間となった。



みんなで仲良くシャボン玉

(5) ESD 勉強会

ESD 勉強会では、昔の暮らしの良いところ・悪いところや今の暮らしの良いところ・悪いところを考え、昔の暮らしの良いところなどをヒントに今の暮らしの「弱点」を「強み」にするために自分たちができることは何かを考え、発表した。まず、昔の暮らしについて1日を通して知ったものや体験したもの以外にも知ってもらうために、昔の道具などを伝えた。そのうえで、今日の体験を通して感じたことなどをワークシートに書いてもらい、変えて



話し合いの様子

いけることはないか班で話し合った。この勉強会は、子どもたちにとっては少し難しいかもしれないという懸念があった。しかし、私たち学生が考えていた以上に一生懸命考え、「自分事」として捉え、今すぐにでもできることを子どもたちは考えてくれた。そして子どもたちは、昔の人たちが今の私たちに伝えてくれた良さを今度は私たちが未来へと伝えていくこと、これからの社会がもっともっと良くなるように自分が行動していかなければならないと学んだ。

(6) さよならの集い

最後、一日の活動を総まとめし、全員で別れを惜しみながらテーマソングを歌った。オリエンテーションの時に比べると、子どもたちは歌詞にもメロディーにも慣れ、大きな声と笑顔で歌えるようになっていた。一日を通して何度も歌った成果をしっかりと感じるようになっていた。そして、私たちユネスコクラブの学生からのプレゼントとして、「See you again」

という歌と「ムービー」を送った。活動班の中では、メッセージ交換を行い、一日ともに過ごした仲間への感謝などを真剣に書いていた。また、司会をしていた学生が迎えに来てくださった保護者への挨拶を行った。子どもたちを信頼して預けていただいたことへの感謝を改めて感じた。最後は子どもたち一人ひとりを出口まで見送った。学生は、大きな怪我をさせることなく子どもたち全員を無事に帰すことができた安心感と達成感を噛み締めていた。



学生からのプレゼント「ムービー」

【幼児】

(1) オリエンテーション

幼児の本イベントは、一日を通して「ペープサート」を用いて進んでいった。オリエンテーションでは、うさぎさんとくまさんが登場し、自己紹介や今日初めて出会った友達と親睦を深め、そして緊張をほぐすことを目的に、アイスブレイキングを1つ行った。後の小学生との交流の時間で、シャボン玉で遊ぶことを踏まえて、幼児にもムクロジを使ったシャボン玉について、うさぎさんとくまさんから伝えた。シャボン玉の歌を歌う場面などでは、大きな声で一生懸命歌っている姿が非常に嬉しかった。



うさぎさんとくまさんと呼んでいる

(2) ポシェット作り

小学生のお兄さんとお姉さんにこの後教えることになるポシェットをみんなで作った。活動班で「うさぎさん、くまさん、ふくろうさん」という3匹の動物に分かれており、自分の班の動物をポシェットに貼っていくという作業を行った。どんな目玉を付けようかな、位置はどこにしようなどと自由に考え、制作したことでオリジナルのポシェットを作ることができた。



どんな目玉にしようか選んでいる幼児

(3) 小学生と遊ぼう

今まで別行動を行っていた小学生とここで交流を行った。初めて会うお兄さんお姉さんに緊

張している子や怖くなってしまいお母さんのところへ行ってしまふ子もいれば、新しいお友達が増えた嬉しそうに話しかけに行く子もいた。アイスブレーキングやシャボン玉遊びと楽しいことを行っていくうちに打ち解け、小学生よりも積極的に楽しんでいる様子も見られ良かった。最後は、小学生に歌のプレゼントをいただき、花道を通って帰っていった。



じゃんけん列車準決勝

(4) さよならの集い

一日を通してのプログラムでの最後となる本企画では、学生からムクロジを使ったシャボン玉液の作り方をプレゼントした。また、床に敷かれた大きな模造紙に、「楽しかったこと」「面白かったこと」「印象に残っている思い出」などを絵にして表すという活動を行った。幼児たちは、今日あったことや思ったことを自由に絵で表していた。学生が「これは何？」などと聞くと嬉しそうにその思い出などを語る幼児に、私たちまで嬉しくなった。



思い出を絵に表そう

9. 成果と課題

【成果】

- 子どもたちがこれから自分たちにできることについて、しっかりと考えることができていた。
⇒子どもたちに学んでほしいことをしっかりと企画にすることができていた。
- タイムマネジメントをしっかりと行い、予定通りの時間に本企画を終えることができた。
⇒活動時間にずれが生じることがなかったことから、所要時間の想定が上手くいっていた。
- 学生同士の雰囲気がよかった。
⇒3回に及ぶ事前研修をしっかりと行い、企画に対してだけでなく学生だけでアイスブレーキングに取り組むなどと工夫をしていた。

【課題】

- 学生の人数が多く、手持無沙汰になってしまっている学生がいた。
⇒実際やることなく、割り振るのも難しかった。学生の人数の規模も来年度は考える必要があるだろう。
- 企画を作ることに必死になりすぎてしまい、事務的な仕事（物品・開催要項等）を直前になって慌てて行ってしまった。
⇒余裕を持った計画が必要である。
- 子どもの人数が第一次募集締め切りまででは、十分に集まらなかった。
⇒もっと子どもが興味をひくチラシを作成する。申し込み方法を考え直すなどと、来年度先生方とも話し合って改善したい。

多くのことを学んだ、第3回集まれ！ESD ども広場

理科教育専修1回生 市川 侑季

令和元年11月17日、奈良教育大学にて第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。今回の活動では、「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」をテーマに、昔の生活を体験することで今と昔の違いなどに気づき自分にできることが何かを探した。幼児7人、小学生（3年生から6年生）11人が参加し、学生リーダーと共に活動をした。今回私は、オリエンテーション班として企画に携わり、当日は活動班に学生リーダーとして加わった。

今回の活動を通して学んだことが3つある。1つ目に事前準備の大切さ、2つ目にアイスブレイクの重要性、3つ目にコミュニケーションを子ども同士でとらせることの難しさである。

1つ目に事前準備の大切さについてである。今回オリエンテーション班として企画に携わっていく中で、何度もアイスブレイクのゲームの練習をした。事前研修にて班員ではない学生の前で行い、改善点などの意見をいただいた。事前に子どもたちの行動を想定してゲームの内容やルール、場面ごとに自分が何をやるのかなどを考えることは難しかったが、何度も改善を重ねることで当日は失敗無く終えることができた。本番を成功で終えることができたのは、事前に様々なことを想定して準備を行い何度も練習したからであり、身をもって事前準備の大切さを感じた。

2つ目にアイスブレイクの重要性についてである。アイスブレイクは、本活動に入る前にゲームなどを行うことでいかに子どもたちの緊張をほぐせるかどうかであり、その一日の活動を積極的に行動し有意義なものにできるかが決まるといっても過言ではない。今回の活動では、ゲームを進めていくうちに子どもたちが笑顔になっていき、自ら発言する子もいた。子どもたちの緊張をほぐす役割をきちんとアイスブレイクで果たせたのではないかと思う。私は活動班の学生リーダーをしていたので、アイスブレイク前は同じ班の子どもと話していたが、オリエンテーションの企画でゲームの進行役をしていたためアイスブレイクの時間は子どもたちとあまり一緒に活動していなかった。アイスブレイク後に班に戻ったとき、アイスブレイク前よりも笑顔で会話も多くなっていてとても衝撃を受けた。アイスブレイクは大切だということについて話では聞いており理解しているつもりであったが、実際に体験してみて痛感した。

3つ目にコミュニケーションを子ども同士でとらせることの難しさについてである。今回の活動で学生リーダーとして班に入ってみて、子どもと大学生のコミュニケーションのほうが子ども同士のコミュニケーションより多かったと感じた。子ども同士のコミュニケーションを増やすことはなかなか難しかった。フィールドワークの移動中に班員みんなでしりとりをすることはあったが、それだけでは子ども同士のコミュニケーションを増やすことはできなかった。フィールドワークでは子どもたちがバラバラに行動してしまうときもあり、班として行動することが難しかったのだが、これは子ども同士のコミュニケーションがあまりなかったからなのではないかと考える。もっとコミュニケーションを子ども同士でとれるよう学生が行動することができていたら、より楽しい活動ができていたのではないかと思う。

以上の3つのことを今回の活動で学んだ。子どもの命を預かるということは、とても責任重大で大変なことであったが、今回の活動を全力でやり通したときの達成感はとても大きなものであった。上手くできたこと、逆にできなくて悔しい思いをしたことを忘れず、しっかりと次の活動につなげていきたい。



寄せ書きをもって記念写真

学生最後の一大イベントを終えて

社会科教育専修 大学院2年生 伊藤 拓海

令和元年11月17日曜日、奈良教育大学キャンパスおよび奈良公園周辺において、「第3回集まれ！ESD子ども広場」が開催された。今年のテーマは、昔の暮らしの良さの中から今の暮らしの問題点を捉え直し、自分から行動する意思を育てるものである。奈良公園でのフィールドワークでは、自然の中にある植物を肌や目で感じ、昔の生活体験では、ムクロジを使って洗濯を行うなど昔の生活を実際に体験し、今の生活との違いを考えた。ESD勉強会では、その体験をもとに今の生活の問題点を見つめ直し、改善のために知恵を絞って考えた。

本活動を終えて、特に3つのことについて学び、考えさせられた。まず1つ目は事前準備、2つ目は幼児と小学生共同での学びにおける効果、3つ目は本活動に携わることについてである。

まず、1つ目の事前準備については、何を企画するにおいても課題となり後悔するものである。しかし、今回は今まで携わったどの企画よりも反省すべきことが多かった。本番間近になるまで、当日動くイメージができておらず、その結果運営との連携も取れない状態であった。1ヶ月前に考えていなければいけないことを前日まで考えていなかったことに、昔の生活体験班全体の意識が足りていなかったと強く感じた。当日は、子どもたちが楽しそうに体験しているのを見て安心したが、「結果良ければ全てよし」というわけではないと、とても悔しい思いをした。

2つ目の幼児と小学生共同での学びにおける効果についてである。正直、今回の企画の重要なポイントの1つである幼児と小学生共同での学びについて前向きな考えを持っていなかった。もちろん異年齢との交流が大切であることは理解しているが、自分が学生リーダーとして、幼児と小学生の子どもたちをうまく関わらせることができず、グループが二分することになるのではないかと考えていた。しかし、私の想像をはるかに超える子どもたちの姿を当日は見る事ができた。途中から班に加わり、少し緊張した様子の幼児に、首からかけているポシェットを指差し「可愛いね、どうやって作ったの？」と率先して声をかけにいく高学年の女の子がおり、それにつられるかのように他の小学生も幼児に話しかけてコミュニケーションを図っていた。その姿を見て、「うまく交流させられないから」という自分勝手な理由で企画を否定することで、子どもの貴重な機会を狭めてしまうところだったと痛感した。はじめに話しかけに行った女の子の姿が、私の目には「緊張している幼児を私が和ませてあげないと」と責任感を持って働きかけているように見えた。それは、幼児と小学生共同の活動をしたからこそ見られた、子どもの可能性の1つであり、活動の大きな意味だろう。

3つ目は、本活動に携わることについてである。私は、ユネスコクラブでの活動期間は短く、昨年に行われた「第2回集まれ！ESD子ども広場」と今回の2度しか大きなイベントには参加していない。しかしながら大学院生活2年間の中での大きな思い出の1つになっていることは間違いない。企画から本番を終えるまでみんなが悩み、時には涙して本気で1つの目標に向かって成し遂げようとするこのような企画に携われたことは、自分にとって大きな財産である。本活動において、企画班では企画長の補佐



班のコールは「さん・さん・さんま〜」

として配置され、当日の活動班でも1年生二人をまとめる班のリーダーとしての役割を与えられた。ど

ちらの役割においても、子どもが安全に楽しく、しっかり学べるかを考え、さらに子どもと関わる学生リーダーの仲間たちも楽しめるように気を配った。しかしそのとき全力を尽くしたように思えても、振り返ってみれば多くの失敗や後悔が出てくる。その度に、自分よりも周りに気を配り、声かけや行動できている仲間に嫉妬してしまう。何度参加してもそれは変わらないが、それで良いのかもしれないと今は感じている。夏休みから毎日のようにこの企画について考え、より良いものをつくろうと動いてきた。その原動力は、達成感や子どもと関わることの楽しさなど様々あるが、その中の1つに、前回よりも良いものをつくりたいという思いがあったからに違いない。前回の悔しい思いがあったからこそ「前回よりも子どもがワクワクするものを、楽しく学べるものを」という思いで臨むことができた。参加した誰もが「100点満点だった」ということはこれからもないと思う。しかしそれが次への活力になり、質の向上に繋がっていくだろう。参加していないものから見れば、大学生が本気でオリジナルソングを歌い、ゲームや寸劇をすることを馬鹿馬鹿しく思うかもしれないが、私にとって本活動とは、子どものためにがむしゃらになることのできる数少ない機会であり、何度でも挑戦したいと思える活動である。

大学院1回生から参加した、このイベントも今年で参加できるのは最後となった。正直ここまで熱中するとは思ってもみなかった。「なぜ？」と聞かれれば、本活動にはそれだけの魅力があり、そこには私を奮い立たせてくれる仲間がいたからと胸を張って答えるだろう。学生の中に、子どもの命を預かりながら自分たちの企画をやり通せたこの経験は、必ずこれからの自分の人生にとって大きな意味を持つだろう。この思いを私だけのものにしたくないと強く思う。どれだけ大変なことであっても、守り続けてほしい。そのためになら、いくらでも貢献したい。そしてまたこの場所に帰ってきたい。素晴らしい仲間と本活動を成功させられたことを誇りに思う。



最後は最高の仲間たちと

子どもたちから学んだこと

英語教育専修1回生 稲富 麻莉

令和元年11月17日に奈良教育大学で第3回集まれ！ESD 子ども広場が開催された。本活動は、子どもたちが昔の暮らしを実際に体験することで今の生活に潜んでいる問題点に気づき、次世代の人々も快適で持続的に暮らしていける社会を作っていく意識を持たせることを目的として行われた。子どもたちに昔の暮らしに触れてもらうために、自然を肌で感じるができる「ネイチャーゲーム」を奈良公園周辺で行ったあとにムクロジの実を使って洗濯をしたりシャボン玉を飛ばしたりした。

私は本活動を通して3つのことを学んだ。1つ目は協力することの大切さ、2つ目は責任の重要さ、3つ目は子どもの可能性である。



子どもたちと仲良く昼食中

まずは1つ目の「協力することの大切さ」についてである。私は本活動を通して、運営の人たちのありがたさに気づいた。運営の人たちは、フィールドワークで春日大社に行く際に先回りをして道中の危ない箇所を立てて子どもの安全を守ってくれたり、次の活動の準備をてきぱきと素早く行ってくれたりした。運営の人たちのおかげで本活動をスムーズに問題なく行うことができた。さらに、子どもたちが活動してきた様子の写真を繋げて最後に動画もつくってくれた。その写真や動画のおかげで本活動が子ども

たちにとって最高の思い出として残り、また来年も本活動に参加すると宣言してくれた子もいた。このように、本活動中に陰でずっと支え続けてくれた運営の人たちの存在がこの第3回集まれ！ESD 子ども広場の成功に繋がったのだ。

次に2つ目の「責任の重要さ」についてである。今回、私は活動班の一員として子どもたちとずっと一緒に行動した。疲れた顔を出さないこと、そして子どもたちから絶対に目を離さないことが活動班の重要な役割だった。子どもたちの命を預かっている身として、子どもたちの体調を優先的に気にしたり、子どもたちの安全を第1に考えたりして目を配ることは非常に大変だと感じた。また、子どもたちの前ではどんなときでも笑顔を絶やさないようにしていたつもりだったが、時間が経つにつれて疲れた顔を何度か出してしまった。自分の行動を変えることで本活動をもっと盛り上げて子どもたちを楽しませられたのではないかと後悔している。ひとりひとりの貴重な時間を割いて本活動に参加してくれた子どもたちのためにも自分のとる行動にもっと責任を持たなければならないと思った。

最後に3つ目の「子どもの可能性」についてである。持続可能な社会をつくるために自分たちにできることを本活動に参加した子どもたちが発表した ESD 勉強会で、昔の暮らしと比べて今は会話が少ないと思ったからテレビを消すと宣言してくれた子や、今の生活をより良いかたちにしていくために、これからたくさん経験を積もうと思うと宣言してくれた子がいた。大学生の私たちが思いつかなかったことを子どもたちが気づけていて、子どもたちから逆に教えてもらうこともたくさんあった。また、初めは恥ずかしがって歌を歌ってくれなかった子が、最後には自分の殻を破って大きな声でテーマソングを歌っている姿を見て1日を通して子どもたちの成長を間近で感じた。本活動に参加したことで子どもたちの可能性は無限大だということを学ぶことができた。

以上の3点が今回の活動で主に学んだことだ。本活動は子どもたちだけでなく、学生の私にとっても最高の思い出として心の中に残った。この学びと反省点を胸に刻んで今後の活動に繋げていきたい。

実らせ奈良パワー

音楽教育専修2回生 狗飼 菜々子

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。今回のテーマは「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」である。これは、春日大社周辺に生息するムクロジの木を中心とした自然に触れ、今の暮らしと昔の暮らしを比較することで今の生活や未来の生活に活かせることを考える活動を行うという内容である。私は小学生を対象としたフィールドワーク班の企画長と、テーマソングのギター担当として参加した。

本活動で私が学んだことは3つある。1つ目に子どもたちの安全を第一に考えることの重要性、2つ目に子どもたちに分かりやすい説明をするための心得について、3つ目に企画の計画的な準備についてである。

まず1つ目に子どもたちの安全を第一に考えることの重要性についてである。私たちフィールドワーク班が企画するにあたって一番悩んだのが、大学からムクロジが自生する春日大社表参道までの安全なルートを考えてきたことである。事前研修で実行委員会から「子どもたちの命を預かって活動している自覚を持つように」と何度も話があり、そのことを踏まえてどのルートを通れば子どもたちの安全が確保されるのかを班員と何度も話し合った。前日にトラブルがあり決まっていたルートを使うことはできなかったが、少々歩く距離が遠くなくても子どもたちの安全がより確保されるルートを使うべきだという班員全員の意見が以前から一貫してあったからこそ、緊急時でも冷静な対応が出来たと思っている。

次に2つ目の子どもたちに分かりやすい説明をするための心得についてである。私たちの班では、フィールドワークの導入の寸劇やネイチャーゲームの際など子どもたちの前で話をする機会が多くあった。事前研修の際に行ったりハーサルで「ネイチャーゲームの説明が分かりづらい」などの指摘を多く貰い、どのような説明を行えば子どもたちに分かりやすい説明になるのか考えた。班員と考えた結果、口からの説明だけでなく目で見て分かるように紙芝居形式の説明にしたり、ネイチャーゲームで使うボックスの形を改良したりするなど工夫を重ねた。相手の気持ちに立って理解できる説明を考えることは将来教員になった際に大切になると感じた。

最後に3つ目の企画の計画的な準備についてである。私たちの班は、フィールドワークの企画自体が大きかったこともあり夏休みから計画的に準備を重ねてきた。計画性を持って企画を準備出



大学生メンバーの集合写真

来たことで、本番当日が近づいても焦ることなく取り組むことが出来た。班のメンバーの5人中4人が本活動の参加が初めてだったため私を含め全員が、企画が成功するか大きな不安を感じていた。事前準備自体も何をしていいのかが始めは全く分かっておらず、全員で話し合いを重ね、手探りで少しずつ企画を作り上げていった。事前準備を着実に進められたことは班員の自信にもつながったと思っている。

以上、3つのことについて主に学んだ。今までユネスコクラブに所属していながらも子どもたちと関わる活動をほとんどしてこなかった私にとって、本活動のために費やした準備期間と本番当日の時間は素晴らしい経験となった。将来小学校教員を目指している私に今足りないものは何なのか、また自分の強みは何なのかを知ることが出来るきっかけにもなった。また、仲間たちと時間や労力をかけ、精一杯作ってきた企画を子どもたちが楽しんでくれるという達成感を味わうこともできた。この経験を忘れずにこれからも積極的に活動に取り組み、自分の力に変えていきたい。最後に、約2ヶ月間の準備、本番当日を共に頑張ってきたフィールドワーク班の仲間と、たくさんの努力とともに本活動を作り上げてくれた実行委員会のメンバー、本活動のために協力して下さったたくさんの方々へ感謝する。

学び合いの大切さ

幼年教育専修1回生 井原 奈佑

令和元年11月17日、奈良教育大学で「第3回集まれ！ESD子ども広場」が行われた。今回は小学生だけでなく、幼児も参加し、第1回、第2回の本活動とは違い2つの企画を同時進行する形となった。私が関わった幼稚園児班の企画では、ペープサートやアイスブレイク、ポシエット作り、小学生とのシャボン玉遊び、振り返りに今日の思い出の絵を描くなどの企画を行った。

今回の活動で学んだことは2つある。1つ目は子どもの興味を引き付けることの難しさについて、2つ目に小学生と幼児がお互いに学び合えたことについてだ。

1つ目に、子どもの興味を引き付けることの難しさについてだ。今回、幼稚園児班の導入として、ペープサートを行った。このペープサートは、内容がオリジナルのものなので、子どもたちが興味を持ち、後に行うシャボン玉遊びにどう繋げるかというのが課題であった。内容は親しみやすいように、登場人物を動物にし、山に散歩に来たうさぎとくまに、山にあるものでもシャボン玉遊びができるということ博士であるフクロウが教えるというものだ。淡々と動物たちが話しているだけでは飽きてしまうので、子どもたちに質問を投げかけたり、途中で紙芝居風にしたり、シャボン玉の歌をみんなで歌ったりと、変化をつけた。質問を投げかけたり、歌を歌ったりすることで、演じている側と見ている側が一緒になって楽しみ、物語をつくることができた。集中力があまり長く続かない幼児でも、興味を持ったうえで学びに繋がるようなものを作ることは難しかった。そして迎えた当日、子どもたちの反応も良く、とても喜んでくれた。そして、一から自分たちでペープサートを作り上げたことはとてもいい経験になった。



ペープサートの様子

2つ目は、小学生と幼児がお互いに学び合えたことについてだ。今回、小学生と合流したとき、班の目印として動物の顔が付いているポシエットを作った。これは事前に学生がフェルトで作ったポシエットの本体に、裏側がシールになっているフェルトで作られた動物のパーツを貼り付けるという、とても簡単なものだ。幼児は小学生と合流する前にポシエットをすでに作っており、合流後、小学生に対して作り方を教えるという形になった。作る際、緊張して自分から話しかけられない幼児に対して小学生から「それ、どうやって作ったの？」などの声掛けがあった。その声掛けのおかげで、お互いの距離を縮めることができていた。ポシエットの作り方を教えることで、幼児から小学生への学びの共有があり、小学生から幼児に関係を持とうと働きかけることで、相互に学び合いができた。一方的ではなく、お互いから学びの発信があったことがとてもよかったと思った。

以上の2つの点から分かることは、一方的な働きかけではなく、お互いに働きかけることが大切だということだ。ペープサートでは、作る側と見る側が一緒になって楽しむことができ、ポシエット作りでは、小学生、幼児がお互いに学び合うことができた。本活動は、私たち学生自身が考えて作り上げたものだが、当日子どもたちと関わることで、子どもたちから学ぶこともとても多かった。これからこのユネスコクラブで様々な企画にかかわるときや、教育実習などに繋がるとてもいい経験になる企画だった。

人に伝える難しさ

家庭科教育専修1回生 氏家 小巻

令和元年11月17日、「第3回集まれ！ESD子ども広場」が奈良教育大学キャンパス及び奈良公園周辺にて行われた。今回の目的は昔の生活の良さを見直すことで今の弱点を見出し、子どもたち自身に自分ができることを考えてもらうことであった。私は奈良公園に向かい、地域の身近な自然に触れてもらうフィールドワークの企画を主に担当した。

本活動を通して私が感じたこと、学んだことは3つある。1つ目に物事を計画的に進めることの大切さ、2つ目に表情の大切さ、3つ目に子どもとの関わり方の難しさである。

まず、1つ目の物事を計画的に進めることの大切さであるが、フィールドワーク班として企画を作るうえで成功の要因となったのは直前の追い込みではなく、長い期間をかけての準備を行ったことだったように思う。事前の準備段階で何度も奈良公園周辺の場所を訪れたり、植物の名前を調べたりすることによって、最善のプログラムを完成させることができた。前日に当初予定していた進行ルートを使えないことが判明し急遽変更するという事態もあったが、当日は臨機応変に対応しその後のスケジュールに影響を及ぼすことなく時間通りに終えることが出来た。これは準備を十分に行っていたことによるものだと感じる。計画的に進めることが内容の充実だけでなく自分たちの自信にもつながり、気持ちに余裕を持つことができた。

次に2つ目の表情の大切さである。本活動の中で私が大きく反省しているのは、自分の主な活動であったフィールドワークが終わった際に安心感から気が抜けてしまい、それを表情に出してしまったことだ。反省会の際には先輩方から学生が疲れを顔に出しすぎていたと言われた。表情について、子どもたちと話すときは気をつけていたものの、最後まで気を緩めずに全力で取り組むことが出来ていなかったことは今後改善しなくてはならないと思った。

最後に3つ目の子どもとの関わり方の難しさである。フィールドワークのネイチャーゲームをしている最中に、お題とは違う植物を持ってきた子どもに対して、間違っていると伝えられなかったことも後悔である。そのとき上手く伝えられるか不安が頭をよぎり、結果として伝えないままプログラムを終わらせてしまった。終わってからの反省として、子どもが傷つかずに間違いに気づくことができるような言い方をその場で出来れば良かったと思った。

本活動にて始めて自分たちの手で作り上げた企画で子どもと関わり、想像以上の苦勞と子どもたち自身の力を感じることが出来た。フィールドワーク班として企画に参加できたことは自分の意見を伝えられるきっかけとなったように思う。どうしたら子どもたちが楽しく安全に学ぶことができるか多くの意見を出し合って、プログラムの改善を行うことができた。しかし、内容が行き詰まったときや緊張しているときなど先輩方の助けがなければ上手くいかなかった点が多くあった。自分の考えよりも先輩方の意見の方が優れていると自信を無くしてしまったときもきちんと1回生にも意見を聞いてくれたことが意見を言えるようになるきっかけであったため、自分に後輩ができたときには同じように全員で企画を作っていくことを大切にしたいと考えた。今後は今回の後悔や反省を生かしてさらに主体的に行動し、自分の意思を伝えられるようになりたい。



フィールドワークの劇の様子

子どもと接して学んだこと

家庭科教育専修1回生 内山 志織

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。本活動のテーマは「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」であり、昔の生活の良さの中から今の生活の問題点を捉え、持続可能な社会にするために自分には何が出来るのか考えることを目的とした。本活動では、ムクロジの実を使い、洗濯体験やシャボン玉遊びを通して昔の暮らしに触れ、今の生活の問題点を考えた。

今回の活動で学んだことは3つある。1つ目に雰囲気作りの重要性、2つ目に体を動かして学ぶことの大切さ、3つ目に子どもと接する楽しさである。

まず1つ目に、雰囲気作りの重要性についてである。私は、活動班のリーダーとして子どもたちと行動を共にした。子どもたちと接することで、子どもたちの興味のあることと、そうでないこととの反応が明確であることが分かった。そして、子どもたちが興味を持ってないことに対していかに興味を持たせられるかについて難しさを実感した。ESD勉強会では、難しい問いに果敢に挑戦しようとする子どもたちへの適した声掛けが見つからず、どんよりとした空気が流れてしまったように感じた。また、誰かが前に立って説明しているときに場を盛り上げるような声掛けができず、気が散って飽きてしまう子どもたちが出てきてしまった。先輩方が声掛けをしている楽しい雰囲気の中では子どもたちの意欲や、やる気を感じられた。このことから、興味を持たせて、意欲ややる気を出させるためには、学生側も声掛けを行って場の雰囲気を作っていく必要があることを学んだ。

次に2つ目の、体を動かして学ぶことの大切さである。本活動では、昔の暮らしについて学ぶうえで、ムクロジの実を洗剤として用いていたことや、シャボン玉として遊ぶことができることを実際に体験し



洗濯体験の様子

ながら学んだ。体を動かし実際に体験することで「想像以上に泡立つんだ」や「結構力があるね」など、座学だけでは得られない発見があることを学んだ。また、実際に体験することで、より昔の暮らしに興味や関心が生まれることが分かった。さらに体験をしながら班の子ども同士で自然と意見を出し合っていたことから、発見や気づきを共有しやすいということも学んだ。以上のように、体を動かして学ぶことの様々なメリットを学ぶことができた。

最後に3つ目の、子どもと接する楽しさについてである。当日、学校も学年も異なる子どもたちが同

じ班として活動することに不安を感じていたが、すぐに打ち解け、手遊びやしりとりをして交流を深めることができた。フィールドワークの際、子どもたちがどんぐりや松ぼっくりを両手に抱えきれないほど持って来た様子を見たとき、私は想像以上に子どもたちが一生懸命頑張る姿に驚かされた。何事も全力で取り組む子どもたちと接することで、共に全力で楽しむことの大切さを学ぶことができた。

以上、3つのことについて学んだ。私にとって本活動は、初めて小学生と接する機会であった。不安はあったものの、こちら側が打ち解けやすい空気を作ることで子どもたちも打ち解けてくれて、班の全員で活動を楽しむことができた。子どもと接したことで自分の自信にも繋がりを将来教師を目指す私にとってかけがえのない良い経験となった。今回学んだことを忘れずに今後の活動に活かしていきたいと思う。

第3回集まれ！ESD 子ども広場から学んだこと

英語教育専修2回生 岡本 英里

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」というテーマのもと、昔の生活や現在ではほとんど使われないことがなくなった道具などの利点や難点を、実際に体験を通して感じてもらったうえで今の利点、難点を考えさせ、未来の生活のために今の自分には何ができるかを子どもに考えてもらう活動をした。

私がこの企画を通して学んだことや感じたことを以下の3点から振り返りたい。1つ目にオリエンテーションの重要性、2つ目に危機管理について、3つ目に楽しさを共有するための状況作りの大切さである。



今回のテーマ発表

まず1つ目の、オリエンテーションの重要性についてだ。今回の企画で私はオリエンテーション班として参加した。オリエンテーションの知識がほとんどなく、人前でそのような活動をしたことが一度もなかった私にとって、これは自分自身への挑戦だった。準備のなかで、オリエンテーションで行うアイスブレイクがいかに重要な役割を持っていて、その順番にさえ意味があることを初めて知った。初めて来る場所で、初めて会う人に囲まれながら1日をスタートさせる子どもの緊張をいかにほぐし、次の企画への流れを作るか。最初に自分が思っていた以上に、それが重要な役割を持っていることに気付いた。そして当日、オリエンテーションが無事に終わった後、子どもや学生の笑顔を多く見受けられた。私自身もはじめは緊張と不安でいっぱいだったが、子どもと学生が楽しんでくれている様子を見て、徐々に緊張がほぐれ、自分自身が1番楽しめた。オリエンテーション全体を見ても、今までの準備がすべて報われるかたちで大成功させられた。また、自分への挑戦といった意味でも大成功だったのではないかと考える。

次に2つ目の危機管理についてだが、私はこの企画に運営班として参加した。そして私は保健係として子どもの健康状態に細心の注意を払いながら1日を過ごした。幸いにも子どもに大きなけがや病気はなかった。しかし、私は常に、子どもが体調を崩してしまう可能性や大きなけがをする可能性を念頭に置きながら活動に参加していた。子どもと関わるうえで何よりも大事なことは子どもの安全で、子どもたちが貴重な時間を割いて私たちの企画に参加してくれていることはあたりまえではないのだと意識しなければならないと思った。

最後に3つ目の楽しさを共有するための状況作りの大切さであるが、これは今回私がこの企画に参加するうえで1番大事にしたことである。そのためにはどうやって子どもを巻き込んで楽しむか、学生だけが自己満足する企画にならないためにはどうすればいいか、ということ自分なりに考えた。そして私はこの企画を通して楽しさというものは、子どもの意思をなんでも肯定し、優しくすることだけでは生まれないことを学んだ。メリハリをつけてテキパキ行動する必要性や、時には厳しく子どもに今すべきことを諭す大切さ、そしてなにより企画者が本気で楽しむ。これらの要素が合わさったうえで本当の楽しさを感じられることを学んだ。

以上の3点が、私が、本イベントを通して学んだことや感じたことである。この企画に参加して、私はたくさんの刺激を得られた。誰よりも声を出しその場をととも盛り上げてくれる先輩方、周りをよく見て行動できる後輩、そしてなにより司会や実行委員、企画班の長としてその企画を引っ張っている同期の姿を見て、自分自身ここで終わってしまっただけではいけないと考えさせられた。私自身まだまだこのユネスコクラブという場所で、もっと成長したいと思う。

第3回集まれ！ESD 子ども広場から学んだこと

社会科教育専修1回生 岡本 真実

11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。本活動では、オリエンテーションや奈良公園内でのフィールドワーク、フィールドワークで採取した無患子を使用して行った洗濯体験とシャボン玉遊び、ESD 勉強会を行った。今回私は、運営班として活動班や他の企画班サポートを行った。

本活動で学んだことは3つある。1つ目にコミュニケーションをとることの重要性、2つ目に視野を広げることの大切さ、3つ目に自主的かつ積極的に行動することについてである。

まず1つ目にコミュニケーションをとることの重要性についてである。本活動では、運営班内で連絡共有を行う場面がとても多かった。しかし、私は自分の仕事内容だけに意識がとらわれていたため他の運営班のメンバーへの情報共有を行うことができなかった。それにより、本活動の準備工程中で抜けている部分があった。加えて、フィールドワークや昔の生活体験班とのやり取りがほとんど行われていなかったため、作業内容について運営班が個人単位で質問をしに行く



ポシエットづくりでの様子

場面もあった。このことから、本活動を円滑に進めていくためには、運営班同士や他の企画班とのコミュニケーションを事前研修時からとる必要があったと言える。また、情報共有に関してもお互いに確認する形で行う必要があったとも言えるだろう。

次に2つ目の視野を広げることの大切さについてである。本活動で行われた奈良公園内でのフィールドワークの際には、子どもの安全を守るために学生らが各ポイントに立つエリアを指定していた。しかし、フィールドワーク活動時にはたくさんの外国人観光客がいたため、子どもたちが人とぶつかりそうになることもしばしばあった。また、子どもと接した際に、一人の子どもを中心に見て声を掛けることやサポートすることが多かった。しかし、運営班として関わるうえで一番重要なことは、子どもたちの安全を守ることと活動班の補助を行うことだった。このことを忘れ、一部分だけを見ていたことは反省すべき点であったと言える。また、視野を広げることでよりサポートを必要としている活動班や企画班に自分が気づくことができただろう。

最後に3つ目の自主的かつ積極的に行動することについてである。本活動では、前日や当日での変更点が多くあった。変更点については自分では理解していたものの積極的に行動することはできなかった。また、オリエンテーション班や昔の生活体験班の寸劇等での反応や子どもへの声掛けを行うこともほとんどできなかった。さらに、変更点に対し主体的に動けなかった場合、本活動のスケジュールの大幅なずれやミスの原因となることが分かった。それを防ぐためにも、自分からサポートが必要な部分に対し主体的かつ積極的に行動していくことが必要になるだろう。

以上、3つのことについて学んだ。これらを踏まえて、今後のESDに関わる活動や大学生活の中では教員としての意識をもって取り組んでいきたいと思う。また、来年行われる「集まれ！ESD 子ども広場」では反省点を生かすだけでなく今回できなかった企画側に沢山参画し、より自分の経験を積んでいきたい。

新たな挑戦

社会科教育専修3回生 奥田 玲央

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD子ども広場(以下「本活動」とする)が行われた。本活動のテーマは、子どもたちが自然遊びや昔のくらしを体験することで今のくらしと昔のくらしを比較して昔の良さを見つけるというものであった。私は本活動でフィールドワーク班・運営として関わった。

私が本活動で学んだことを3つ挙げる。1つ目は臨機応変な対応のための準備について、2つ目は子どもの思考について、3つ目は本活動の存在意義についてである。

まず1つ目の臨機応変な対応のための準備についてである。今回のフィールドワークでは、出発地点を附属小学校の横にある北門に設定していた。しかし、急遽使用不可になり、活動地までの移動時間が大幅に伸びてしまった。移動時間の変更によって活動時間が短縮されたため予定していたゲームの一部を実行できないと判断し、プログラムを変更してゲームを進めたが、フィールドワーク班のメンバーで協力して対応したことで、想像を超える子どもたちの喜びの顔が見られた。出発前に起こった不測の事態から状況に応じた対応が可能になったのは事前準備を早期から始め、当日の行動に余裕を持って取り組んでいたことが要因だと考える。当たり前のことであるが、準備と本番の間は短すぎず遠すぎずというのが最適であり、最適な状態で挑むことかできた今回の本活動ではフィールドワーク班全員が心に余裕をもって臨むことができた。このように落ち着いた状態で本番を迎えることで不測の事態が起きたとしても冷静に受け止め、対処できるということを学んだ。



ムクロジを初めて見る子どもたち

次に2つ目の子どもの思考についてである。子どもの思考というのは単純であるがゆえに難しいものだというところを改めて学んだ。楽しいやつまらないといった感情というものは揺れ動きやすいが、ESD勉強会における「自然のために自分ができること」などの思考は一度印象づいた考えが変わりにくい。周りの子の意見に引っ張られることはよくあることだが、学生の発言に引っ張られてしまうという事態は避けなければいけないと強く感じた。学生の発言はあくまでも子どもたちの思考のヒントであるという意識を各自が強く持つことで、子ども一人ひとりの思考が深くより良いものになるということを実感した。

最後に本活動の存在意義についてである。本活動はテーマからもわかるように、子どもが自然に触れ、自身が触れた自然のものを使った洗剤で洗濯をする等の体験をすることがメインになっている。近年ESDが教育現場において重要視されているが、やはり座学では担いきれない経験という分野の少なさが子どもたちの思考を狭くさせていると考えられる。そんな中、本活動では体験を通して子どもたちに経験させることを主な活動としているため、座学で得た知識に経験で得た知識を上乗せすることができる。このような点から、本活動は子どもたちが自身のこれからを考える際に経験から得た考えを盛り込むことができる素材の一部として捉えることができると考えている。本活動の認知度を高めていくことで、子どもたちの思考の幅を広げる機会、経験することの大切さや面白さを伝えていくことができる機会が増えていくということ学んだ。また、経験に基づいた自身の考えを持つことができる場であることを私たち自身が理解する必要があることを感じた。

以上3つが本活動における私の学びである。本活動で得た学びをこれからの活動はもちろん、学校生活やその他ボランティア等の場面で活用していきたい。

写真係を通して学んだ出来事

社会科教育専修1回生 加藤 真由

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われ、幼児7名、小学生11名、大学生47名が参加した。当日、大学生は活動班、企画班、運営班と主に3つの班に分かれて行動していた。

私は本活動で学んだことが3つある。1つ目はイベントや企画の作り方、2つ目に運営の役割、3つ目に子どもとのかかわり方である。

まず、1つ目のイベントや企画の作り方についてである。私は企画班には属していなかったが、企画自体がどのようにして作られていくのか、そして企画を作りあげていくことの大変さを事前研修等から学んだ。その中でもAEDの使い方やフィールドワーク中の危険から子どもを守る方法などの講話を通して、安全性が高くなければどんな企画を考えても意味がないということが一番印象に残った。また、当日に活動班の学生が保健系の学生に対して「フィールドワーク中に子どもが尻もちをついた」といった普段なら問題視せず、過ごしてしまうようなことを報告しているところを見て、子どもの安全管理や危機意識ということがどういうものなのか考えることができた。

2つ目は運営の役割についてである。運営の役割というと次の企画がスムーズに進むように用意をするなどのイメージが強いが、それだけでないということに気が付いた。具体的にはフィールドワーク中の子どもが事故に巻き込まれないようにその場の安全確認をする、活動班の学生がその場を離れなければいけないときに子どもが一人にならないように子どもたちのところに行く、企画終了時に流すムービーをつくるといった企画の用意以外の役割がたくさんあると知った。だからこそ運営には臨機応変に対応する能力、周囲を見渡す能力が必要と感じた。

3つ目は子どもとのかかわり方についてである。私は当日、写真係として動いていたので特別子どもと接する機会が多かったというわけではないが、子どもや子どもと接している学生の写真を撮ることを通して、他の学生の子どもの関わるうえでの工夫を多く見ることができた。例えば、出会ってすぐの子どもとしゃがんで話すのではなく一緒に座って視線を合わせながらスキンシップをとっていたということだ。これは座って話すことで子どもに威圧感を与えないようにするための行為だったのではないかと考えた。このほかにも様々な工夫が感じ取れたが、その中でも一番印象的だったことがあった。それはフィールドワーク中に子どもがメモをしていたときのことである。一人の子ども(以下Aとする)が自分の班の一人の学生リーダーにかまって欲しそうにアピールをしていたのだが、その学生はその場でAに対してAが書いたメモを褒めるなどの対応をしていただけでなく、Aの隣でメモを書いている最中だった同じ活動班の子ども(以下Bとする)に対して頭をなでていた。この出来事はAの欲求を満たすだけでなく、メモを取っているBに対して集中を妨げない且つ「きちんとBのことも見ている」ということを子どもに感じてもらうための学生の配慮だったと考えた。私がこの学生の立場であったら、目の前のAに対する反応だけで終わり、かまって欲しいと思っていたかもしれないBに対して寂しい思いをさせていたと思う。目の前のことにとらわれず、周囲を見て行動するということの大切さに気付かされた。

以上の3つについて主に学んだ。私は今回の学んだことをこれからの機会に活かしていきたいと思う。



本企画終了時の歌

全力で動く大切さ

社会科教育専修1回生 木村 萌々香

令和元年11月17日、奈良教育大学と奈良公園周辺で第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。本活動のテーマは「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」であった。「みのり」ということで、ムクロジの実を使った洗濯体験やシャボン玉体験などがあった。それらの体験を通して、昔の生活について考え、今の生活と比較したうえで、今の生活の問題点を改善していく案を子どもたちに考えさせることが今回の目的であった。

私は、この活動を通して学んだことが3つある。1つ目は子どもとの関わり方、2つ目は臨機応変な対応、3つ目は全力でやりきるということである。

まず、1つ目の子どもとの関わり方について述べる。私は、運営班であったため、子どもと関わる機会が少なかった。しかし、これは言い訳に過ぎないと思う。子どもに関わるきっかけは、自分からいくらかでも作ることができたと思うからだ。また、「子どもの前では笑顔」とずっと言われていたのにも関わらず、だんだん時間が過ぎていくうちに疲れた顔をしてしまっていた。疲れた怖い顔をしていると子どもたちも喋りかけたくないだろう。これからは、子どもの前では笑顔を絶やさないと意識していこうと思う。

次に、2つ目の臨機応変な対応について述べる。運営班で自分に与えられた仕事はもちろんある。しかし、自分の仕事がなくなってしまうたら何もすることがなくなる。私はそのとき、先輩方に指示を仰ぐこともなく、ただ、ぼうっとしてしまっていた。与えられた仕事をするだけなら、誰にでもできることであり、自分にしかできないようなことをできるようにしたいと強く思った。しかし、それが何かはまだわからないため、これからの活動や色々な体験を通して探していこうと思う。



参加者全員での集合写真

最後に3つ目の全力でやりきるということについて述べる。この活動ではたくさんテーマソングを歌う機会

がある。最初のうちは恥ずかしくてあまり声を出すことが出来なかった。しかし、事前研修を重ねるたびに声が出るようになった。そして当日、なぜそこまで全力でしなければいけないのか分かった。それは、最後に子どもたちと一緒にテーマソングを歌ったとき、ある子どもの保護者の方が涙を流していたからだ。その姿を見て、なぜかわからないが、私も涙が出そうになってしまった。私たちが1日かけて全力で歌ってきたテーマソングが子どもに伝わり、全力で歌う子どもたちから保護者の方へ、1日の子どもの成長が伝わった瞬間であると感じた。私たちが全力でやりきると、子どもたちにもしっかりと伝わっているということが改めて確認できてうれしかった。

以上、3つのことについて主に学んだ。今回初めてこの活動に参加してみて、色々なことに積極的になれなかったことが本当に悔しかった。これからは、今回学んだことを十分に生かしていけるように、日々努力し、次に備えていきたいと思う。

第3回生まれ！ESD 子ども広場をおえて

幼年教育専修1回生 久保 かのん

令和元年11月17日、奈良教育大学において、第3生まれ！ESD 子ども広場が行われた。本イベントでは、昔の暮らしを体験することで気付いた昔の暮らしの良い点今の暮らしの問題点をとらえ、自分には何ができるかを考え行動する意志を持つことを通して、持続可能な社会について子どもたちが考えることを促した。具体的な内容としては、アイスブレイク、洗濯板と桶およびムクロジの実の洗剤を用いた洗濯体験、ムクロジの実から作ったシャボン液を使って幼児とシャボン玉遊び、そしてESD勉強会が挙げられる。

本イベントを以下の3点で振り返る。1点目に子どもたちとの交流について、2点目に子どもたちの前に立ち活動する立場としての責任について、3点目に事前の準備の計画性についてである。

1点目は、子どもたちとの交流についてだ。朝子どもたちが不安と期待でいっぱいの中本イベントに来たとき、一部の学生は積極的に話しかけにいていたが、私も含め残りの学生は壁際に固まって学生同士で会話をしていた。人数が多かったこともあるが、子どもたちからしてみれば大人が固まって話していることに恐怖を感じるかもしれない。初めての環境や他の子どもたちや学生に囲まれる中で生じる子どもたちの緊張をほぐすべき学生が、今回のような行動をとっていたことは反省すべきだと感じた。また、



洗濯体験の様子

学生が積極的に子どもたちのもとへ行き交流を図ることによってその後の関係や進行にも影響を及ぼすことが分かったため、積極的に子どもたちと交流することの大切さを学べたとともに、実感した。

2点目は、子どもたちの前に立ち活動する立場としての責任についてだ。私は今回のESD勉強会で進行を行った。当日の朝まで悩んでいた内容で勉強会に挑んだため、不安だらけで子どもたちの前に立っていた。おそらく勉強会のときだけではなく勉強会以前でも表情や言動に不安がにじみ出ていたのではないかと感じている。しかし、子どもたちにとってはそのようなことは関係なく、勉強会を進めている学生ということに変わりはない。そのような中でいかに堂々と子どもたちにふるまえるかということ、どれだけ余裕をもって子どもたちの前に立つことができるかということ、そして、不安を表情に出さないことの大切さを学んだ。

3点目は、事前の準備の計画性についてだ。今回、フィールドワークへ行くときに開ける予定だった門が急遽開けることができなくなった。安全面を考慮すると時間が大幅にかかってしまい、タイムスケジュールどおりに進行できるかわからないという問題が前日に出てきた。フィールドワーク担当だった学生たちは事前準備を計画的に行っており、前日にその問題が発生しても臨機応変に対応し、すべてタイムスケジュール通りに進行できていた。前日に慌てて準備をするものがなかったからこそ、このような対応ができたのではないと思う。今回のフィールドワーク担当の学生たちを見て、いかに計画的に準備をしておくことが大切か学ぶことができた。

以上3点が本イベントを通じて特に学ぶことができた点である。様々な学びがあった本イベントは子どもたちのけがもなく無事に終わることができ、一番の目的であった子どもたちの行動化を促すこともできた。子どもたちが笑顔で本イベントを終えられたことの喜びや、本イベントで感じた悔しさや達成感、上記した学びを忘れず、またこのような活動の機会を頂けることに感謝しながら今後の活動にも取り組んでいきたい。

「第3回集まれ！ESD 子ども広場」での学び

技術教育専修1回生 熊野 里沙

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。今回はムクロジの実を軸として「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」をテーマに、奈良公園で直接自然に触れたり、昔の生活体験をしたり、ESD勉強会をして、昔の生活の強みと今の生活の弱点を子どもたちに気づかせ、よりよい生活のために自分には何ができるかを考えさせるという企画であった。

本活動で学んだことは3つある。1つ目に子どもの可能性を引き出すことの重要性、2つ目に情報共有の大切さ、3つ目に場を盛り上げることである。

まず1つ目の子どもの可能性を引き出すことの重要性についてである。私は幼児だけで行うポシェット作りと、小学生と幼児一緒に行うポシェット作りに参加した。初めに幼児だけで作ったとき、幼児は作業をするたびに学生に何度も確認をして完成させていたので、幼児が小学生にポシェットの作り方を教えることができるのかと私は不安に思っていた。しかし小学生に教える立場になると、幼児は自分がつまづいた作業のポイントを教え、小学生のポシェットが完成したときには一緒に喜んでいた。私はそのときに、子どもには私がまだ知らない可能性があることに気がついた。そこで、私が教師になったときはそのような可能性を引き出すことが重要だと感じた。



みんなで円陣

次に2つ目の情報共有の大切さについてである。私は今回、運営班として活動させていた

だいた。当日は様々な変更点があり、運営班は周りを見て臨機応変に動くことが大いに求められた。しかし、運営班内や運営班以外の仲間との情報共有が出来なかった場面が何度かあり、何をしたら良いかが分からず、素早く次の行動に移すことができなかった。このことから、子どもたちに最大限楽しむことができる場を提供できていなかったと考える。そのうえ、子どもたちに危険を及ぼす可能性を高めることに繋がるだろう。よって、これからは情報の共有を大切にして、安全かつ子どもたちが全力で参加できる場をつくりたい。

最後に3つ目の場を盛り上げることである。ユネスコクラブに入部してから、学生が場を盛り上げることはとても重要だと先輩方が言っているのを何度も耳にしてきた。しかし、私は本活動で、全力を出して場を盛り上げることができなかった。その原因は、経験不足だと考える。ここでの経験不足というのは、子どもと関わる活動に参加した回数が少ないというよりも、それらの活動や本活動の事前研修などで声を出すことを怠ってきたということである。私は本活動に参加して、学生が声を出して盛り上げることが、子どもたちにとっても、この企画を作っている学生たちにとっても大事であるということに身にしみて感じた。これからの大学生活の中では、場を盛り上げることを積極的に実践していき、上手く盛り上げられるようになりたい。

以上3つのことについて主に学んだ。私は、本活動に参加して楽しかったのはもちろんだが、後悔が多く残っている。今回失敗したことや後悔したことを糧に、これからの活動では全力を出しきり、子どもたちとより楽しく関わりたい。

自分のなかにみのったもの

英語教育専修1回生 桑垣 夏輝

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD子ども広場が行われた。本活動のテーマは「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」である。春日大社参道にあるムクロジの実を水に入れて振ると泡立ち、昔は洗濯の洗剤に使われていた。そこから本活動では実際に昔のようにたらいと洗濯板を使って昔の洗濯を体験したり、ムクロジを浸けておいた液を使ってシャボン玉遊びをしたりした。そのうえで昔の生活と今の生活の強みと弱点を考え、これから自分たちができることは何かを考え、実践していきたいことを発表した。本活動は小学生だけでなく幼児も参加していた。幼児はペープサートを通してムクロジの実を使ってシャボン玉が作れることを学び、その後それぞれの班ごとに決められた動物を貼り付けたポシエットを作った。そこから小学生と合流し、一緒にポシエットを作ったり遊んだりした後、シャボン玉遊びをした。

今回の活動で学んだことは3つある。1つ目に子どもとの距離の縮め方、2つ目に自分がすべきことを探すということ、3つ目に楽しむことである。

まず1つ目に子どもとの距離の縮め方についてである。今回自分は幼稚園児班に所属していた。幼児は午後からの活動だったが、家の都合により午前中から会場に来ている幼児がいた。他の幼児はまだ来ていないため学生とその幼児で遊ぶ時間が多くなった。おりがみやキーボードなどで遊んでいたが、緊張もありあまりコミュニケーションを取れなかった。だが、広いスペースで鬼ごっこをしたところ、笑顔も増え少しずつ話せるようになった。午後になってやってきた幼児は積極的に話しかけてくれたり、こちらから声をかけるとたくさん話してくれたり幼児によって仲良くなるきっかけはそれぞれだということを実感した。今後子どもたちとかかわっていくうえで、アプローチの引き出しを増やしていくべきだと実感した。

次に2つ目の自分がすべきことを探すということについてである。これまで前に立つときには、全て自分がやらなければならないと考えていた。しかし、今回担当の活動班で手が空いたときに小学生の活動に混ざったり、裏での片づけなどをしたりしてみて、人のサポートをすることも大切だと感じた。次回は今回とは違う仕事もしていきたい。

最後に3つ目の楽しむことについてだ。事前準備でそれぞれの活動のプレを行った際、自分が楽しいと思っても、外に出さなければ伝わらな

いということは何度も感じた。何をどう思われても大丈夫だと思うまでには少し時間はかかったが、思いつき自分の感情を外に出すことで自分も周りも楽しめたのではないかと感じた。そしてそのことを見てくれる人がいたこともあり、思いつきやって正解だったと思った。

以上3つのことを学んだ。初めて本活動に関わったためわからないことも多くあったが、今回で全体が見えてきたため次回は今回よりも深く関わっていきたい。



ペープサートの様子

企画長と運営班を通して学んだこと

国語教育専修2回生 桑田 佑香

令和元年11月17日、奈良教育大学にて第3回集まれ！ESD子ども広場が行われた。本イベントではムクロジを使った体験学習を通して、昔と今の暮らしについての比較をした。フィールドワークでは春日大社周辺でネイチャーゲームを行った後で、ムクロジを拾ってもらった。その後、ムクロジを使ってシャボン玉遊びの体験や洗濯体験を行った。次に、ESD勉強会では、今の生活をより良くするために昔の生活で活かせることはないか考えて実行することを目標にし、昔と今の暮らしを比べてそれぞれに強み（良いところ）と弱点（悪いところ）があるということに気付いてもらった。

本イベントで感じたこと、学んだことは3つある。1つ目は企画長としての役割、2つ目は早めに行動することの重要性、3つ目は運営班としての行動である。

まず、1つ目に企画長としての役割についてである。本イベントで初めて企画長として企画に携わらせてもらった。昔の生活体験班を任せられ、リーダーとして班のメンバーを引っ張っていかねばならなかったのだが、結局は先輩に任せきりになってしまうことが多かった。また、仕事の割り振りをうまくすることができず、企画の詳細を決めることが遅くなってしまった。このことから、自分一人でなんとかしようしたり、班員に任せきりになってしまったりするのではなく、みんなで作り上げていくことが重要であると感じた。

2つ目に早めに行動することの重要性である。前述したとおりリーダーとして仕事の割り振りをうまくできなかったために、企画の詳細を決めることが遅くなってしまった。加えて、焦りを感じ始めることが遅かったようにも感じた。そのため、次のイベントに参加するときには期限までに企画書を提出したら良いと考えるのではなく、余裕を持って行動したい。

最後に、3つ目の運営班としての行動である。今回も前回と同様に運営班として参加した。今回は運営班の人数が非常に多く、全員にうまく仕事を割り振ることが難しかった。そのため、周りをよく観察して、活動がしやすくなるように動くことが求められていたと思う。それでも仕事が見つけられなかったときは、先輩の動きを見て手伝いに行ったり、活動班の様子を見て子どもと関わったりするようにした。前回の本活動での子どもとうまく関われなかったという反省を活かして行動することができたと思うので、次回参加するときにはより積極的に関われるようにしたい。

以上3つのことについて学んだ。今回は学生の参加人数が多かったことや、初めて幼児の参加を受け付けたことなど前回から変わったところがあったので、臨機応変に行動することが重要になっていたと思う。本イベントで反省点や良かったと思う点がいくつかあった。反省点は改善し、良かったと思う点は次に繋がられるようにしたい。



運営班が子どもと関わる様子

学生チーフリーダーとして

英語教育専修2回生 後藤 旭

令和元年11月17日、奈良教育大学内及び奈良公園周辺で第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。今回は、「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」をテーマとして、昔の生活について学び、体験する中で今の生活や持続可能な生活について考えた。幼児と小学生は3つの活動班に分かれ、各班で交流をしたり、意見を交わしたりした。今回私は学生チーフリーダーとして、子どもや学生、本企画全体の動向を見て声をかけたり、サポートしたりする役割を担った。

この第3回集まれ！ESD 子ども広場で学んだことを、以下の3つの観点から述べたいと思う。1つ目は学生間の信頼関係の重要性、2つ目は子どもを見る観察力、3つ目は先を見通すことの大切さである。

まず1つ目の学生間の信頼関係の重要性について述べたい。私は学生チーフリーダーとして本企画全体を見ていた中で、学生間の信頼関係が、企画に大きく影響していると感じた。話し合いなどを通して、学生間の信頼関係が築かれてからは、活発な意見交換が行われ、各プログラムがより良いものになっていた。また、当日の子どもの前でもこの信頼関係は重要であると考えた。子どもは学生のことをよく見ているので、学生間に信頼関係があるかどうかすぐに見抜く。今回は学生間に良い関係が築かれていたので、子どもはそれを感じ、活動班の雰囲気も非常に良くなっていたと考えた。これらのことから、一つの企画を複数人で作りあげられる場合、各参加者が意識して、良い関係を構築していくことが企画を良いものにしていく一つの大切な要素であると感じた。

次に、2つ目の子どもを見る観察力について述べたい。予め子どもが取り得る行動や反応を予測しておくことは非常に重要である。しかし、実際の子どもの行動や反応は、その場で見ないと分からない。また、子どもの体調や気分にも同じことが言える。それらを素早く感知するには、観察力が必要である。これはフィールドワーク中に顕著に感じた。私は、子どもの様子を観察するために子どもの表情をよく見る。今回のフィールドワーク中に私は、必ず各曲がり角に先回りして、子どもに声を掛けながら子どもの表情を観察するように努めた。観察する中で表情が暗い子どもには、体調を尋ねたり、一緒にいるようにしたりした。子どもにとって、本企画は慣れない環境であるので何が起きてもおかしくない。行動の前には観察が必ず必要であると考えた。行動を素早く行うためにも観察力は必要であると実感できた。

最後に、3つ目の先を見通すことの大切さについて述べたい。準備段階から、先を見通す力は必要であると感じていた。次に何をすべきか、また、どのようにすべきかなどを常に考えることが大切である。先を考えて動くからこそ、時間やそれぞれのキャパシティに余裕が生まれ、その余裕を有効に使うことができる。また、先を見通す際に、企画本来の目的を意識することが重要であると思った。やらなければいけないことに追われ、軸を見失わないようにしなければならないと本企画を通して強く感じた。

今回、私が達成できたことは、企画段階から本番まで本気で臨み続けられたことである。この企画にしっかりと向き合い、行動することに妥協は一切しなかった。今回得たものをさらにレベルアップさせていきたい。



真剣に話を聞く子ども

子どもとコミュニケーションをとるうえで大切なこと

美術教育専修1回生 小林 実理

令和元年11月17日、奈良教育大学で、第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。今回は小学生11人、幼児7人、計18人の子どもたちが本イベントに参加した。今回は「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」というテーマを設け、自然を利用した昔の暮らしと、今の生活を比較してもらい、現代の問題点は何か考えてもらうという企画をした。このイベントでは、ESDの視点を持ち、考え、行動する力を養うことを第一の目標としている。今回私は、子どもを楽しませる学生側として本イベントに参加した。

今回、本イベントで学んだことは3つある。1つ目に子どもと同じ視点になることの難しさ、2つ目に自然を使った子どもが楽しめる遊びを用意することの大変さ、3つ目に絶えず話しかけることの大切さである。

まず1つ目に子どもと同じ視点になることの難しさについてである。私たち大学生はこのイベント当日までに何度も話し合い、どうすれば子どもたちが楽しんでくれるか、どうすれば真剣に取り組んでくれるかを考え、そのために様々な工夫や準備を重ねてきた。しかし、本物の子どもを目の前にすると思っていた返答ではなかったり、予想以上に長い答えが返ってきたりして、思うように進まないことも多々あった。このことから、大学生として子どもに接するより先に、まず子どもたちと同じ視点に立ち、どれだけ子どもの視点になれるかが、今回のようなイベントをスムーズに進める重要な鍵になってくると感じた。

2つ目に自然を使った子どもが楽しめる遊びを用意することの大変さである。今回はムクロジという木の実を使って洗剤や、シャボン玉を作ったが、当日までの準備に苦労した。ムクロジという木の実が、春日大社付近のムクロジの実を落とす時期が他地域と違っており、木はあっても実はどこにも落ちていなかったのだ。そのため、自然のものを使うときは時期の設定なども考える必要があり、大変だと感じた。



ムクロジの実でシャボン玉を作る子どもたち

3つ目に絶えず話しかけることの大切さである。私は運営班に就いていたため、子どもと直接触れ合う機会は少なかったが、周りの学生が積極的に子どもに関わろうとする姿を何度も見かけることができた。例として、最初は母親から離れられずにいた男の子が、最後には学生と一緒に皆の輪の中に入っており、しかも子どもの方から学生に話しかけていた。学生側から積極的に会話しようと努力した結果、子どもの信頼関係を築くことができたようだった。

以上、3つのことを主に学んだ。本イベントを通し、奈良教育大学の学生として、とても貴重な体験ができたように思う。事前の準備で想定していた子どもの言動と、実際の現場での差、子どもたちの言動の差やそのときどう対応すべきか等、自分たちにまだ足りないものが何かを知るきっかけになった。ここで学んだことは今後、子どもとの触れ合いの場で活かせるようにしたい。

失敗は教訓に、成功は誇りに

国語教育専修2回生 西條 秀哉

令和元年11月17日に奈良教育大学及び奈良公園周辺にて「第3回集まれ！ESD子ども広場」（以下本活動とする）が開催された。本活動は子どもたちにESDを体験的に楽しく学ばせることを目的とした学生主体の活動であり、今年度のテーマは「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」である。主な活動の流れとしては、奈良公園の植物を利用したネイチャーゲームや、無患子の実を使った洗濯やシャボン玉遊びの体験を通して「昔の生活」について興味関心を持たせ、その後の勉強会にて「昔の生活」と「今の生活」を比較し、「今の生活」の問題点を考え、「未来の生活」のために自分たちにできることを考えさせた。私は裏方総括として本活動に携わり、尽力した。

本活動における自分の活動を3つの面で振り返る。1つ目は「柔軟な対応で時間を管理すること」、2つ目は「冷静に事実を受け止めて考えること」、3つ目は「見通しを立てて計画的に動くこと」だ。

1つ目の「柔軟な対応で時間を管理すること」については当日の活動を通して感じた。昨年度の第1回、第2回の本活動では、私はどちらも活動班の学生リーダーとして子どもたちと関わっていた。故に今回は運営側として、子どもたちと学生の活動の様子を今までとは別の視点から見ることができた。そしてその中でも特に今までと違っていたのはタイムスケジュールの管理だ。活動班として活動していたときは、しおりに書いてある程度の大まかな時間（各プログラムの開始時間や、休憩時間など）を把握していれば十分に子どもたちに指示ができた。



開催直前の円陣

しかし運営班は、「このプログラムが行われている間に次のプログラムの物品を用意しておくといけない」、「このプログラムが早めに終わったので次のプログラムの開始時間を早めよう」といったような、1手先2手先の活動を把握して、その場その場の臨機応変な対応をすることが必要不可欠であった。活動班が子どもの命や学びに細心の注意を払うことと同じくらい、運営班は時間管理と柔軟な対応が重要であることを実感した。当日は想定外の大きなタイムスケジュール変更こそあったものの、運営班と企画班と活動班全員で協力することで冷静に対応し、スケジュール通りの時間で子どもたちを帰すことができた点は本当に素晴らしいと思う。

2つ目の「冷静に事実を受け止めて考えること」については当日までの準備期間のときに感じた。今年度の本活動は1回生の参加が圧倒的に多く、本活動に初めて参加する学生が大半であった。だからこそ来年度以降もこの活動を続けていくため、1回生や初参加の学生にはぜひ積極的に企画に参加してほしいと考えていた。しかし、どうしても中心に立っているメンバーとそうではないメンバーとの間で本活動に対する熱量の差が顕著に見られた。本来であれば私も実行委員として参加してくれた学生を鼓舞し、ともに企画を作っていくよう促していかなければならなかったはずだが、その熱量の差と自分の抱える負担の大きさから精神的に疲弊し、自身のモチベーションも大きく下げってしまった。最終的には、先輩や同級生に背中を押してもらって何とか企画に対する意欲を取り戻し、他の実行委員とともに全体の空気を盛り上げることができた。今回の反省点は、一度モチベーションを落としてしまったことではなく、周りの状況と自分が置かれている状況を冷静に受け止めて行動できなかったことにある。今回は冷静な判断ができないまま「どうして積極的に参加してくれないのか」「どうして自分

だけがこんなに忙しいのか」と自分で自分をどんどん追い詰めてしまったことで、自身の意欲すら喪失させてしまった。自分の思い通りにならないことや、想定外の出来事が起きた際に、それを受け止めて「では自分は何をするべきか」を冷静に考えることの重要性を今回の活動を通して学んだ。この反省は今後の活動や将来教員になった際に、必ず活かされるだろう。

3つ目の「見通しを立てて計画的に動くこと」については本活動全体を通して感じた。裏方総括という大きな責任と重い負担がかかる役に就いたにも関わらず、始めは自分が今何をすべきなのか、企画班をどう支援すべきなのかが全く想定できていなかった。そうして自分では何も自発的に行わないまま、操り人形のように先輩方の指示して下さったとおりのことしかしていなかった。その後企画が進んでいくうちに自分の立ち位置やすべきことがだんだん分かってくるようになり、自分も企画を動かす主要メンバーの一人だという自覚と自信を持てるようになった。それからは自発的に全体への呼びかけや企画班へのサポートを行うことができるようになったが、動き出すのが遅すぎた。当日の動向表や物品表など重要な資料の作成を当日間近になって先輩にさせてしまったのだ。このことは私の本活動における一番の後悔であり反省点でもある。自分が請け負う担当がどのような役割で、当日までの期間にいつどこで何をするのかを最初の段階から見通し立てて活動に専念すべきだったと痛感した。このことは、今後の活動や企画の際には肝に銘じておきたい。

以上の3点が本活動を通して私が学んだことである。いずれも今後のユネスコクラブでの活動や他サークルでの活動、そして将来教員になった際に私を助けてくれる力強い教訓だと感じている。そして何より、およそ5か月にわたって作り上げられてきた本活動が事故も重大な失敗もなく無事に成功したことは本当に私の、そしてユネスコクラブの誇りだと思っている。今回の経験で得た教訓と自信に誇りをもって、今後の活動や学びに邁進していきたい。



笑顔で集合写真

学びをみらいへ

心理学専修1回生 阪中 菜々子

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD子ども広場が行われた。本活動では、小学3年生から小学6年生までを対象に、子どもたち自身が昔の洗濯や遊びを体験し、現在の暮らしを昔の暮らしと比較しながら見つめ直し、未来へ向けて改善していくことの大切さを学んだ。また、幼児用のプログラムも企画し、昔の遊び体験やゲーム、ポシエット作りを通して、幼児と小学生との交流をはかった。

本活動で学んだことは、3つある。1つ目は主体的に行動することの大切さ、2つ目は子どもたちとの関わり方、3つ目はイベント運営の際の責任感である。

まず1つ目に、主体的に行動することの大切さについてである。本活動には47名と多数の学生が関わっており、決められた役割をこなす時間よりも、自由に動くことのできる時間が多くあった。その時間の中で、今自分のできることは何か、今必要となることはどのようなことか、イベント全体を見ながら自ら行動に移すことのできる主体性を身につけなければならないと感じた。

2つ目に、子どもたちとの関わり方である。本活動を通して初めて子どもと関わる経験をし、また経験ある先輩方の子どもへの接し方を間近で見ることができた。そのため、子どもたちはどんなときにどんなことを考えていてどのように接すればよいのか、ということが自分の中で具体的に思い描きやすくなった。

最後に3つ目の、イベント運営の際の責任感についてである。本活動を通して、イベントを運営することは参加者の安全を守る、ひいては命を守ることと同義であるということを強く意識した。集まった参加者全員が後悔を残すことなく、楽しく活動を行うためには、あらゆる事態を想定して備えておくことが必須である。そのために、運営側は安全性の面から厳しくイベントを見定める必要があると気付くことができた。



全体集合写真



小学生と幼児の交流

以上、主体的に行動することの大切さ、子どもたちとの関わり方、イベント運営の際の責任感の3つについて、本活動を通して学ぶことができた。しかし、この学びも今後行動に移さなければ意味のないものになってしまう。本活動を通して子どもたちが現在の暮らしの改善点を見出し、自分の行動を見直したように、私自身も自らの行動を変えていきたい。この経験をここで終わりにせず、感じたことや考えたことを心に留めて、次の活動へ繋げたい。

学生として子どもたちの学びに向き合う集大成

英語教育専修4回生 坂本 和音

令和元年11月17日、「第3回集まれ！ESD子ども広場」が開催された。今回のテーマは「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」とし、無患子という木の実が昔は洗剤として使われていたということを中心に、昔の生活から現代の生活を振り返るという活動を行った。私はオリエンテーション班、活動班の1班の学生リーダーを担当した。

本企画を通して感じたことを3つの視点から振り返りたい。第1に事前準備の重要性、第2に子どもたち同士のコミュニケーションを促すこと、第3にこれから繋げていくことである。

第1の事前準備の重要性についてであるが、本企画で最も不安だった点は事前研修においてなかなかプレ活動を本番通りに行えなかったことである。活動の時間の一部を取り出して本番と同じ流れで活動を行ったことはあったが、前日準備の日にやっと活動の全体像を把握することができたと感じた。今回のテーマにおいて軸となる無患子を使った洗濯体験も実際にどんな泡ができるのか、洗濯物をどこまできれいにすることができるのかという多くの疑問点を抱えながら本番の日を迎えてしまったということは大きな反省点である。このことから子どもたちの学びを作る中で、私たち学生がその目的や過程を十分理解し、共有することの重要性を学ぶことができた。また、子どもたちが企画の中で活動をしている姿が想像できないという状況が長期間にわたり続いたことで活動班の学生リーダーとして、子どもたちをより深い学びへと導かなければならないという不安と焦りを募らせてしまっていたということも事実である。本番では子どもたちが無患子からできた泡を使って一生懸命に汚れたタオルを手洗いし真っ白にすることができた。その様子を見て、無患子の泡で汚れは本当に落ちるのだという驚きと子どもたちが狙い通りの体験をしていることへの安堵を感じた。無患子を水中で振って泡を発生させるという体験でも、初めて見る大量の泡に子どもたちだけではなく学生たちも驚き、興奮していたことは印象的である。



無患子で泡ができた様子

第2の子どもたち同士のコミュニケーションを促すことについてであるが、活動班に入る学生リーダーとして、活動班の中で子どもと学生だけではなく子どもたち同士の会話がより活発にできる雰囲気作りが必要であったと考える。私がそのために重視した点はお互いの名前を呼びあうことである。朝の集合からオープニングまでの時間に班内で自己紹介を行ったのだが、そこでは自分のあだ名と学年と小学校を言わせるようにした。なかなか恥ずかしくて言えない子は学生が小さな声を聞き取り、繰り返して班員全員に伝えたり、「何年生？」と質問をしたりしていた。また、「あの子の名前覚えてる？」と質問をして名前を呼ぶように働きかけた。すると、フィールドワーク中のネイチャーゲームでお題のドングリを1つも見つけられずに困っていた女の子に「○○ちゃん、私のを1つあげる！」と言ってドングリを譲っている様子が見られた。ドングリを譲ってくれたことも嬉しかったのだが、相手の名前を呼んで話しかけていたことが何よりも嬉しかった。すぐに、もらった子には「よかったね！」、譲ってくれた子には「やるじゃん！ありがとうね。」と褒めてあげる声掛けを行った。二人ともとても笑顔になってくれていて、子どもと関わる楽しさを実感することができた。子どもたち同士のコミュニケーションを促すには、まず学生から話しかけるお手本を見せ、できた場面を見つけて褒めたり、会話に入ったりという働きかけが非常に重要であるということを知ることができた。

第3に本企画をこれから繋げていくことについてであるが、私は第1回から第3回までの「集ま

れ！ESD 子ども広場」に参画することができたことを誇りに感じている。それは、毎回異なるテーマでESD について子どもたちに学ばせようと真剣に向き合う仲間たち、楽しく一生懸命に取り組む多くの子どもたちの笑顔に出会うことができたからである。子どもたちの学びを一から考える場に関わり、実践し、悔しい思いをたくさん噛みしめてきたからこそ、将来教員を目指す学生にとってこの企画は必ず大きな糧になるということを私は確信している。3回にわたって本企画に参画してもまだまだ学びが足りないと感じる場面がたくさんあった。子どもたちから一瞬でも目を離してしまったこと、上回生として同じ活動班の一回生ともっと距離を縮められる機会があったのではないかということ、オリエンテーション班のゲーム構成について名前を呼びあうゲームを取り入れたら子どもたち同士のコミュニケーションが少し変わっていたのかもしれないということなど挙げていくときりがない。しかし、完璧ではないからこそ次への展望が見えてくるのではないかと思う。第3回集まれ！ESD 子ども広場で出た反省や改善点がこれからのユネスコクラブの活動で活かされ、よりより学びの場をつくる原動力になることを心から願っている。

以上の3点が本企画を通して感じたことである。もっとできたかもしれない、あのときこうしてればよかったと後悔している点もあるが、「全力で楽しめた！」ということは自信を持って言える。今まで卒業生の方々に助けられてきたように私も卒業生としてこれからもずっとこのユネスコクラブを支え続け、学んだことを糧に教員として子どもたちの学びに精一杯向き合っていきたい。



学生全員で「実らせ奈良パワー！」

子どもと触れ合う中で

音楽教育専修1回生 佐藤 ころろ

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD子ども広場が行われた。

今回の第3回集まれ！ESD子ども広場で学んだことは3つある。1つ目に子どもとの触れ合い方、2つ目に子どもと関わるうえで大切なこと、3つ目にイベントの雰囲気づくりだ。

まず、1つ目に子どもとの触れ合い方についてである。本イベントでは、大学生は実際に子どもたちと関わり、サポートしていく活動班と、裏方でイベントが円滑に進むように準備や片付けなどをする運営班に分かれて活動する。私は、活動班として子どもたちと関わった。イベントがはじまり、子どもたちを受け入れるとき、緊張してやってきたり、なかなか皆の輪に入れなかったり、自由に動きまわったりなど様々な様子の子供たちがいた。初めは、どのように対応したらいいのかわからなかったが、話しかけることで緊張が解け、徐々にまとまりができてきた。しかし、自由に動き回る子どもには、対応ができなかった。また、前に立って説明しているときに話してしまう子どもに対しても対応ができなかった。どのように注意をしたらいいのか、子どもの話をさえぎってしまっていないのかわからなかった。子どもの緊張をほぐすことは、活動をしていく中で必要なことだが、注意をするということもメリハリをつけるために大切だと思った。



活動班の様子

次に2つ目の子どもと関わるうえで大切なことについてである。子どもを預らせていただいている以上、私たちは色々な責任を負っているということを改めて実感した。怪我や事故に注意しながら、子どもたちを楽しませるということを念頭に置くということが大切だと思った。その中で、本イベントを通して、子どもたちは大学生の表情をよく見ていると思った。大学生が楽しそうにしていると子どもたちの表情が明るくなり、笑顔が増えていたが、大学生が疲れて表情が暗くなったりすると、子どもたちの笑顔が消え、口数も少なくなっていたように思う。また、子どもたちと話すときは、目線の高さをあわせたり、ゆっくりと丁寧な言葉使いで話したりするなどの工夫がいたと思った。以上のことから、子どもたちと接するうえで大学生の表情や話し方などに気を付けることが大切だと思った。

最後に、3つ目のイベントの雰囲気づくりについてである。2つ目でも述べたように子どもたちは大学生の表情をよく見ている。それと同様に、周りの雰囲気にも敏感に反応していると思った。ゲーム中のガヤの飛ばし方、歌を歌うときの盛り上げ方など、子どもが過ごしやすい雰囲気や環境づくりは大切だと思った。それを作るには、私自身、不十分なところが多かったが、周りの先輩たちのやり方をみて、大学生が思いっきり楽しめば、子どもたちもついてきてくれると確信した。



歌っているときの様子

以上の3つが本活動を通して私が学んだことである。子どもを預らせていただいているという責任の重大さ、そのうえで安全に楽しませ、かつ自分自身も楽しむということの必要性を学んだ。私自身、力不足なことが多かったが、本イベントで学んだことを今後の活動や学校生活などの様々な場面に活かしていこうと思う。

子どもたちと仲間から学んだこと

特別支援教育専修2回生 下垣内 渉平

令和元年11月17日、奈良教育大学で「第3回集まれ！ESD 子ども広場」が行われた。対象は、小学校3年生から6年生までの児童と、幼稚園や保育園などに通う幼児であった。はじめに、オリエン班のアイスブレイクで心と体の距離を縮めたのち、3つの活動班に分かれて活動した。奈良公園でのフィールドワークにて自然を使った学習を行ったことや無患子と桶と洗濯板を使った昔の人の洗濯体験をするなかで、「昔と今の生活の良さや悪さ、生活の違いって何だろう。」「昔の生活の良さや今の生活の良くないところを見て、今の生活に生かせること、変えていくべき自分の行動って何だろう。」ということを考えさせた。そして活動のまとめとして子どもたちが自ら行動していけるように考えさせる勉強会を行った。最後は、さよならの集いで歌をうたい、1日の出来事を振り返りながら、お互いの別れを惜しんだ。また、今回は新たな試みとして、幼児も参加した。幼児は昼から2時間ほどの参加であったが、ポシットづくりや無患子を使ったシャボン玉体験を小学生との交流を通して行った。

今回の第3回集まれ！ESD 子ども広場で学んだことは3つある。1つ目は初対面の子どもたちとのコミュニケーションの取り方や子どもたち同士の関係性の作り方が難しいと感じたこと、2つ目は活動班の子どもたちの考える力や発想力に驚いたこと、3つ目は今までの自分と比較したときに、より一層人前で楽しませる楽しさを感じたことである。

まず1つ目は、初対面の子どもたちとのコミュニケーションの取り方や子どもたち同士の関係性の作り方が難しいと感じたことについてである。活動班での子どもたちとのコミュニケーションの取り方があまり十分ではなく、後悔するところが多く残る活動になった。具体的には初めて子どもたちが来たときに、積極的にこちらから関わろうとしたが、子どもたちの受け答えにあわせてしまって話が尽きてしまったり、続かなかったりしてしまった。最終的には活動班の子どもたち全員とコミュニケーションをとることはできた。しかし、子どもたちが初めて来たときに、こちらがくじけそうになるのではなく、もっと積極的に子どもたちを知ろうという気持ちでコミュニケーションをとることができたのではないかと思った。本活動で、一番心残りなことは、子どもたち同士での関わり合いをもっと持たせることができたのではないかということだ。活動中は子どもたちと関わることで精いっぱいだったが、振り返ってみると、子どもたち同士でのつながりも学生リーダーがつくっていくべきだったと思う。学生リーダーが子どもたち同士のつながりをつくるためにも、まずは学生リーダーと子どもたちでコミュニケーションをとって信頼関係をつくる必要がある。具体的には、子どもたちとフリーで関われる休み時間などの空き時間を使って絵しりとりをしたり、数字や質問系のゲームをしたりなどの簡単なレクリエーションをするような、班の中でのアイスブレイクをすることが挙げられる。これからは、コミュニケーションを十分にとるためにそのような準備もしていきたいと思う。

次に2つ目は、活動班の子どもたちの考える力や発想力に驚いたことについてである。フィールドワークや昔の生活体験で、子どもたちが自分自身で体を動かして体験しているときに、すごくいきいきした様子をみせていた。そして、体を動かしながら頭もフル回転させており、「まっぼっくりはどんなところにあるのかな」、「あ、どんぐり見つけた」、「大きいシャボン玉できた」、「このシ



子どもたちの真剣な話し合い

「ヤボン玉割れへん」、「力入れてごしごししたら汚れとれた」など活動の中で子どもたちが夢中になっている姿を見て、様々な気づきをしているなど感じた。その中で、学生リーダーがもっと工夫した声掛けをすることができたのではないかと思った。学生リーダーの工夫した声掛けや問いかけ、発問次第で子どもの気づきが深まったり、浅くなったりすると思うので、次に子どもたちと関わる機会があったときには、どんな工夫した声掛けができるかしっかりと準備することが大切だと思った。

最後に3つ目は、今までの自分と比較したときに、より一層人前で楽しませる楽しさを感じたことである。もちろん緊張もするが、子どもが楽しそうに笑っている姿を見てみると、もっと楽しませようという思いが強くなり自然と緊張はなくなっていった。しかし、そのように人前で何かをすることが楽しいと思えるようになったのは、自分だけの力ではない。アイスブレイクをするときなどの周りの人のギャグやゲームに関する様々なアイデアを聞くことができた点は、周りの人の支えがあつてこそだと思う。今回のオリエンで、人前で楽しませる楽しさを感じられたと同時に、自分自身が様々な人に支えられていると感じた。さらに、周りの人々の支えがあつてこそ、成功できると感じたので、誰かが人前で何かをするときには、楽しく、スムーズにできるように、どのようにサポートできるかをしっかりと考えたいと思う。

以上3つのことについて学んだ。本活動では、前回よりも学んだこと、楽しいこと、悔しいことなど様々なことを、本当に多く吸収したと感じた。今回の報告書では、3つに凝縮して上記のように書かせていただいたが、3つだけでは表現しきれない多くのことを学んだ。今回学んだことの多くは、初めてオリエン班の企画長と活動班のリーダー長の2つをさせていただいたことからきており、本活動で子どもと真正面から関わる本当に貴重な体験させていただいたと思う。もちろん改善しなければならないこと、自分の力不足に悔しいと思ったことなど、楽しいことばかりではなかったが、このことは他のボランティア活動や実習など様々な子どもと関わる機会を生かせると思うし、絶対に生かしていこうと思う。また、この経験を自分のものだけにするのではなく、周りの人たちにも還元していきたいと思う。最後に、初めてオリエン班の企画長や活動班のリーダー長をさせていただいたが、自分の力だけでは絶対にうまくいかなかったと思う。無事に本活動を終えることができたのは、上記のように様々な改善点や悔しいことや自分の至らない点がある中で、周りの人の支えがあつてこそであり、改めて周りの支えによってうまくいっていることがわかった。周りで支えてくださったり、助けてくださったりした方々への感謝を忘れないようにしたいと思う。



子どもたちと学生リーダーとの集合写真

私たちはまだまだ成長できる

英語教育専修3回生 下原 舞

令和元年11月17日、奈良教育大学キャンパス及びその周辺地域において、第3回集まれ！ESD子ども広場が開催された。今回のテーマは「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」で、奈良県や京都府内の小学生11人が本活動に参加してくれた。子どもたちはオリエンテーション、フィールドワーク、昔の生活体験、幼児7人との交流、ESD勉強会などの企画をもとに、昔の生活と今の生活を比較しながら持続可能な社会のために自分たちにできることとは何かを考えた。

今回私は、運営班の一員として、そして子どもたちと歌うテーマソングなどのギターを担当として本活動に参加した。そこで、本活動を通して学んだこと、感じたことを3つにまとめたいと思う。1つ目に臨機応変に動くことの大切さ、2つ目に情報共有の重要性、そして3つ目に一人ひとりの意識を揃えることの難しさについてである。

まず1つ目の臨機応変に動くことの大切さについてであるが、これは本活動全体を通して強く感じたことである。当日私は、事前に与えられた仕事以外の時間に、運営班に所属しながら必要ときに必要な場所で必要な役割を担う「フリー」として動くことになっていた。総合アドバイザーや他の運営班メンバーの指示に臨機応変に従い、全体を見ながら「今どこで何がどれだけ足りていないのか」などを見極める力が求められていた。実際に、奈良公園でのフィールドワーク中、急遽私はタイムキーパーの役割



臨機応変に時間短縮したフィールドワーク班の学生たち

を担うことになった。その際、学生チーフリーダーと話し合い「このまま予定通り進めると時間が押してしまう可能性がある」と判断し、フィールドワークの企画班メンバーにその旨を伝え、工夫して時間短縮をするよう促した。その結果、最低限の企画内容の変更で、子どもたちは予定していた時間通りに奈良教育大学キャンパスに戻ることができた。また今回はその他にも、当日の時間の進み具合や子どもたちの様子を見て学生が臨機応変に判断し、行動できたことが多かったように思う。しかし反省点として、下回生の学生たちが臨機応変に動けるような指示をうまく出すことができなかつたこと、急な変更を他の学生に伝える際に私が焦ってしまい、子どもの耳にも変更内容が伝わってしまいそうになったことなどが挙げられるため、次回以降はよく注意すべきだと思う。

次に2つ目の、情報共有の重要性についてであるが、これは1つ目で述べた「臨機応変に動くこと」と繋がるところがある。状況に合わせて臨機応変に判断、行動できたは良いが、その変更事項が他の運営班メンバーや学生に伝わっておらず、混乱を招くきっかけとなってしまったのだ。私は第6回ESD子どもキャンプに初めて参画したときから、「情報共有の重要性」を強く感じていた。どんなに細かい変更や情報でも学生の間ではいち早く共有するべきであると、過去の活動の中で何度も確認していたのにも関わらず、今回突然の変更事項を他の学生に伝えることを幾度か失念してしまった。運営班や企画班など、役割は関係なく、学生は常にアンテナを張り、臨機応変に行動して変更は即座に共有することが重要であると痛感した。臨機応変さと情報共有の徹底の大切さを次回以降も心がけ、後輩たちにも引き継いでいきたい。

そして3つ目に、一人ひとりの意識を揃えることの難しさについてである。本活動に携わった学生の人数は実に48人で、そのうちの多くは初めて本活動に関わる1回生であった。最初から本活動に熱い「想い」を持つ学生もいれば、他のことに追われてなかなか本活動に力を入れることができなかつた学生もいたように思う。企画班1つ取っても、自ら積極的に行動し指示を出す学生と、指示待ち状態になってしまっている学生、なかなか連絡を返さない学生などが見られ、学生の間で温度差が生まれてしまっていることが、当日まで気がかりでならなかつた。本活動に参画するにあたって、子どもの安全と徹底した準備のために、参画する全ての学生は事前研修の出席を義務づけられている。そのため当日には一人ひとりの意識の高さは同じであるべきだが、経験や学年、それぞれが置かれている境遇などにもよって、大勢の学生の意識を統一させることはなかなか簡単にはいかないものである。私自身、今回は留学からの一時帰国中での参画となり、自分自身のモチベーションを高めるのに時間がかかってしまったと自覚している。しかし、そのような個々の事情、経験や学年などによる言い訳は、当日の子どもの前では一切通用しない。全員が同じ責任を背負い、感じて、子どもたちと向き合わなければならないのである。今回参画した1回生の学生たちや私自身には、その意識が足りていなかったのではないかと感じている。奈良教育大学ユネスコクラブは100人以上の学生を抱える大きな団体であるため、以上のことに気を付けながら、次回以降の活動に向けて精進していくべきだと考える。

最後に、本活動全体を通して、後輩の成長や先輩の偉大さ、同学年の学生たちの存在の大きさに改めて気付くこととなった。この活動に参画する度に、学ぶこと、感じるが多くあるが、その一つひとつを忘れることなく、必ず次回以降に繋げてまだまだ全員で成長していきたい。



「みのらせ奈良パワー！」終了後、笑顔の学生たち

私が本活動で学んだこと

音楽科教育専修1回生 住釜 未唯

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD子ども広場が行われた。

今回の活動で学んだことは3つある。1つ目に子どもに声をかける勇気の大切さ、2つ目に子どもが笑顔になる嬉しさ、3つ目にみんなで子どものために一つのものを作りあげる楽しさである。

まず1つ目に子どもに声をかける勇気の大切さについてである。本活動本番の日、初めて会う子どもたちがたくさん来た。活動が始まったとき、どのように接したら良いのか戸惑い、ほとんど子どもとかわることが出来なかった。しかし、近くに子どもがいる際に身近なアニメやゲームの話題を振ってみると、楽しそうにその話題について話してくれた。私はそのことに驚き、最初から話しかけに行けば良かったと感じた。もちろん接し方を考えることも大切だが、まず話しかけなければ何も始まらないということ学んだ。子どもと話しているうちに声の調子や速さなども身につけていくように感じた。この反省を次のボランティア活動で活かし、最初から自ら進んで子どもに話しかけ、接し方を学ぶ機会にしようと考えた。加えて、ボランティア活動の前には子どもと話す内容をいくつか考えておき、その内容を話すようにすると、より話しかけやすくなり会話を続けることができるのではないかと考えた。

次に2つ目の子どもが笑顔になる嬉しさについてである。一つずつ次の企画へ進んで行く際に、子どもがみんな楽しんで笑顔で活動している様子を間近で見ることが出来た。私が特に記憶に残っているのは、ムクロジを使ってシャボン玉遊びをする活動のときの子どもたちの笑顔である。私は運営班として、子どもたちを見守っていた。子どもたちの様子を見てみると、みんな笑顔でシャボン玉を作っており、シャボン玉液をつける量や、息の量を調節したりなどして、一人ひとりが工夫をしながら楽しんでいった。上手にシャボン玉を作ることができた子どもは、一緒に遊んでいる子にコツを教えてあげたりなどして、和気あいあいとしていた。私自身も積極的に子どもにシャボン玉の工夫について話を聞いて回り、子どもの考え方を知ることができた。本活動を通して、子どもたちの笑顔をみることができたことは非常に嬉しく、事前研修に取り組み少しずつ活動を積み上げてきて良かったと心から思った。



笑顔になった子ども

最後に3つ目のみんなで子どものために一つのものを作りあげる楽しさについてである。私は最初はこの企画を知ったとき、軽い気持ちで参加することを決めた。今まで子どもと関わる機会がほとんど無かったため、少しでも子どもと関わってみたいという思いと、ユネスコクラブに入部している以上、何らかの活動に参加してみたいという思いからだった。私はみんなで一つのものを作る活動を学校のクラス以外でしたことがなかった。そのため、ユネスコクラブとしておよそ50人もの人たちと共に一つのことをやり遂げることは初めてであり、新鮮に感じた。第1回の事前研修の際、本当に50人もの人で一つのものを作り上げられるのか不安に感じた。しかし、事前研修を積み重ねるに連れて、みんなの必ず成功させたいという気持ちが伝わってきて、私も成功させたいと心から思うようになった。そして本番は無事に終わり、私はみんなで一つのものを作り上げることの楽しさを味わうことができた。

以上、3つのことについて主に学んだ。本活動により今後も積極的にボランティア活動に取り組み、子どもを笑顔にする活動を続けていくことを決意した。本活動で学んだ子どもへの接し方をこれから行うボランティア活動に生かしていこうと思った。

ESD 子ども企画の転換期に関わった最後の当事者として

英語教育専修 修士2回生 谷垣 徹

奈良教育大学では、奈良市内のユネスコスクール等に通う子どもたちを対象に、ESD を体験的に楽しく学び合う活動として、2012年から「ESD 子どもキャンプ」という1泊2日の宿泊活動を行っており、2018年より日帰りの活動に切り替えて「集まれ！ESD 子ども広場」を行ってきた。今年度は新たな試みとして、幼児と小学生を対象として開催した。私はこの活動に6年間携わり、今年で最後の年を迎えた。

私は今回の活動を通して、そして6年間の全ての関わりを通して様々なことを学び、感じてきたが、それらを以下の3点でまとめたい。1つ目は子どもの命を預かることの責任、2つ目は学生自身の当事者意識、3つ目は企画に取り組む学生の努力についてである。

1つ目は子どもの命を預かることの責任についてであるが、これは6年間の関わりの中で最も強く印象に残っている学びである。私が最後のESD 子どもキャンプで代表を務めたとき、一人の学生が参加者の児童に怪我をさせるという事故を起こしてしまった。私たち学生の意識や企画の体制に何が不足していたのか、今後私たちはどのようにこの企画を行っていけばよいか、当事者の学生の間で膨大な時間をかけて議論し、作り上げたのが集まれ！ESD 子ども広場である。その根底には、まず何より子どもの命を預かる自覚を意識させることがある。この決定と意思には、誰よりも強い思い入れがある自負がある。しかし、この件に関わった当事者が企画に関わることができるのは今年が最後であり、来年以降は当事者がいない体制となる。この教訓は、決して風化させてはならない。今回の企画の開催に向けた事前研修で、その思いを全学生に伝えた。今後は彼らがこの教訓を風化させることなく継承し続けてくれることを願うと同時に、私自身も卒業生として学生を支援する立場から関わり、伝え続けていきたい。

2つ目は学生自身の当事者意識についてである。この企画への参画を通して、学生は子どもとの関わり方、企画運営力、他者との協力・連携など様々なことを身につけてきたが、ESD を体験的に楽しく学び合う活動として、SD(持続可能な開発)に関する関心や理解もそのうちの重要な一つである。しかし、最近では学生の間でこの点が不十分であると感じている。日常のニュースには私たちの身の回りや地球規模の様々な課題があふれているが、どれだけそれらの課題に関心を向けられているか、自分ごととして当事者意識を持って考えられているか、今一度立ち止まって考え直すときが来ていると感じる。子どもに当事者意識を持たせ、行動化を促すには、まず学生自身がそうしなければならない。学生の中でもそういった課題意識を持ち始めた者もあり、その意識が醸成していくことを願っている。

3つ目は企画に取り組む学生の努力についてである。ここまで、「今後こうなってほしい」という展望を書いたが、私は学生の最上級生として、必死に企画に取り組む後輩たちの姿を多くの場面で目にしてきた。プログラムを成功させるための企画面、運営面での関わりだけでなく、学生一人ひとりの成長、またその限界も見守って的確に支援する姿があった。きめ細やかな配慮や、チームを一致団結させて一つの目標に向かわせる促し方など、私にはできなかった素晴らしい関わりであった。この企画への関わりを通して、一人ひとりが確実に成長している。そんな学生たちの努力に、敬意と賞賛を示したい。



最後まで頑張ったユネスコクラブの学生

私は事情により、事前段階のみの参画であったが、6年間の集大成として事前の企画・準備に関わることができたこと、後輩たちの成長を見られたことを大変嬉しく思う。そしてこの企画を支えてくださ

った大学の先生方、職員の方々、卒業生の方々、現職の先生方、その他全ての方々に感謝したい。

子どもの成長を見ながら自分も成長する貴重な経験

教員研修留学生 チャ スンフン

令和元年11月17日、第3回集まれ！ESD子ども広場が開催された。本活動はESD（持続可能な開発のための教育）を楽しく体験的に学び合う活動である。学生には子どもと関わる活動を通して、教員を目指すうえで必要な資質・能力を身につける機会であり、本活動で子どもたちには昔の生活や自然での遊びの体験を通して、今の生活の問題点を考え、未来に向けて改善していく大切さを学ばせることを目的とする。今回のテーマは「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」であり、ムクロジの実を使った洗濯体験やシャボン玉遊びを通して昔の暮らしに実際に触れさせ、ESD勉強会では今の生活の問題点をとらえ、未来を変えるために自分ができることを考えさせる活動が行われた。

今回の活動を通して学んだこと、感じたことを3点述べたい。第1にユネスコクラブの学生だけで全てを企画し、それを子どもに伝えられる機会の大切さについて、第2に様々な活動に関わることで自分が成長できたことについて、第3に突然の危機状態をみんなの力で解決する中で協力する重要性に気づいたことについてである。

まず第1にユネスコクラブの学生だけで全てを企画し、それを子どもに伝えられる機会の大切さについてである。6月頃のテーマ決定を皮切りに、各班に分かれた学生たちは活動の準備に最善を尽くした。「ムクロジを使ったシャボン玉遊び」という学生一人のアイデアから始まり、当日の充実した素晴らしいイベントまでに変貌を遂げたのは、間違いなく学生みんなの思いや努力で作上げた結果であった。特にフィールドワーク班は、奈良公園でムクロジの木がある場所を探し出し、何度も下見をしながら子どもが自然に触れられるネイチャーゲームを準備した。また、最近の子どもが最も関心を持っているものに焦点を当てた寸劇は、班のみんなで知恵を出し合ったからこそ、独創的で良い寸劇に仕上がったと思う。何よりも活動を楽しんでいる子どもの表情を見たときに、自分たちが意図していたものが現実となっている様子が見られてとても嬉しく、これまでの苦労が全て解消されるような気がした。教育に関連した活動で、このように大学生だけの力でプログラムを企画し、実践する経験は中々得難いので非常に有意義な活動であった。

第2に様々な活動に関わることで自分が成長できたことについてである。昨年開かれた第2回集まれ！ESD子ども広場の際には申し込みが遅れ、運営班の限られた仕事しかできなかったが、今回はしおりの表紙のデザイン、フィールドワーク班、会計係、カメラ担当など様々な活動に関わることができた。表紙デザインの場合、絵について全く素人であったが、「一度やってみようか」という思



フィールドワーク中の寸劇

いで描いたものが運良く選ばれた。また周りから良い反応が聞けたため、「何でも挑戦してみよう」という自信を得た。だが、寸劇でユーザーの役割を提案された際は、果たして期待に応えられるかどうか凄く心配した。日本に来て1年過ぎたといえ、まだ日本語の実力が不足しているため、多くの人を

楽しませる役をこなせるか不安だったからである。しかし、今回だからこそできる良い経験になると思って挑戦した。そして、フィールドワーク班のみんなが心身共に助けてくれたおかげで、無論足りないところもあったが、無事に終えることができた。おまけにムクロジについて初めて知り、奈良公園に自生している多様な植物について知識を蓄えることもできた。最後に、写真を撮ることで子どもの表情をもっと身近に感じることができ、子どもが楽しんでいる姿をとらえた際は、さらにやりがいを感じた。このような様々な活動を通じ、自分も非常に成長できたと思う。

第3に突然の危機状態をみんなの力で解決する中で協力する重要性に気づいたことについてである。本イベントの当日に最も心配していたことは、前日の急な移動ルートの変更であった。移動ルートは何度も現地足を運びながら話し合った末に決めたものであり、子どもの安全やネイチャーゲームの時間や全体のタイムスケジュールなどに大きく影響するものだった。そのため、本イベントの前夜に突然変更されたことにフィールドワーク班員はみんな非常に戸惑った。しかし、班員のみんなはすぐに落ち着き、一丸となって新しいルートやゲーム数の変更などを決めた。また当日、ゲームの途中で時間が足りなかった際は、事前に話し合う時間がなかったにもかかわらず臨機応変にゲーム数を減らすことで時間を稼ぎ、用意した内容も十分に伝えられた。また、オリエンテーションで時間を稼いでくれたことや、応援に駆けつけてくれた卒業生の方々が道で安全を確保してくれるなどの助け合いも欠かせないことであった。このように、みんなのおかげで決まった時間内にフィールドワークが終わる良い結果となった。今回の体験を通じ、どのようなことがあっても、みんなが助け合えば乗り越えられることを学んだ。また助けてくれたユネスコクラブのみんなに感謝の気持ちを伝えたい。

上述したように、本イベントを通して様々なことを学んだ。無論、難しいところもあったが、そのことをみんなの力で解決することで仲間の大切さを感じられ、またユネスコクラブの確かな一員になったような気がして非常に嬉しかった。このような素晴らしい活動が今後も末永く続くことを心の底から願うところである。



活動後の集合写真

第3回集まれ！ESD 子ども広場を経て自分はどうしたいか

社会科教育専修1回生 辻 悠佑

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」をテーマに、フィールドワークや昔の生活を実際に体験することを通して、今の生活と昔の生活を比べて昔の方が良かったところ、今の良くないところを子どもたちに見つけてもらうというイベントであった。またこのイベントに向け3回の事前研修を行った。

今回の活動で学んだことは3つある。1つ目に事前準備の大切さ、2つ目に声を出していくことの大切さ、3つ目に子どものペースに合わせることである。

まず1つ目に事前準備の大切さについてである。計3回行われた事前研修では、それぞれの企画のリハーサルや緊急時の対応についての説明などが行われた。この事前研修を行ったことによって、それぞれの企画で自分がどう動けばいいのかが分かり、当日に変更が起きたときも対応がしやすくなった。また、事前研修を受けるにつれて、子どもの命を預かるということ、子どもの大切な時間をいただいているということを実感するようになり、より気を引き締めて本番に臨むことができた。

次に2つ目の声を出していくことの大切さについてである。自分はあまり盛り上げるような声掛けの仕方が得意ではなく、事前研修や当日においてもほとんどできていなかった。しかし、当日の最初のころの子どもたちの様子を見てみると、初めての環境ということもあってあまり声が出せてはいなかったにもかかわらず、オリエンテーションのときに学生が声掛けをしていくことで、子どもたちが徐々に声を出していくようになっていった。ここから、学生側の声掛けによって子どもが声を出しやすくなっていったことが分かる。もし声掛けをしていなかったら、子どもたちは思ったことをなかなか口に出せず、最後まで静かな状態でこのイベントが終わってしまっていたかもしれない。だからこそ子どもたちが自分の気持ちを声に出せるよう、よりにぎやかで楽しいイベントとなるように声掛けをしていくことは大事であり、自分も声を出していく必要があると考える。

最後に3つ目の子どものペースに合わせることについてである。このイベントには幼児も参加していたが、その中にはまだ親から離れられない子もいた。しかしその子に対し、自分と同じ1回生の男子が隣に寄り添ってあげていた。歌を歌うときや、実際に活動するときにも寄り添ってあげることでその子どももこのイベントに参加することが出来ていた。そしてその子どもは少しずつ親から離れることができ、男子学生と二人で企画に参加し他の幼児たちとも交流し、最終的にはその子どもだけでほかの幼児たちに混ざることができていた。子どものペースに合わせた寄り添い方ができていなければその子どもは最後まで親から離れることができず、このイベントを十分楽しむことはできなかったかもしれない。子どものペースに合わせたサポートをしていたからこのように最後は一人で参加できたと考える。

以上、3つのことについて主に学んだ。これらのことは実際に経験し、子どもたちのようすを見たりしたからこそ学べたことであり、知識として学ぶこととは違った深い学びとなったのではないかと考える。今回学んだこと、特に声掛けについてを、普段の生活から変え、生かせるようにしたい。



学生による環境づくりの様子

初めて活動作りに携わって学んだこと

社会科教育専修1回生 長滝谷 幸子

令和元年11月17日、奈良教育大学において、第3回生まれ！ESD子ども広場が行われた。当日は、小学生と幼児に分かれて活動し、小学生は奈良公園でのフィールドワークや昔の生活体験、ESD勉強会を行った。幼児はポシエットづくりやペープサートの鑑賞を行った。また、小学生と幼児合同でムクロジを使ったシャボン玉遊びを行った。

今回の活動で学んだことは3つある。1つ目は企画づくりについて、2つ目は運営としての動き方について、3つ目は子どもたちとの関わりについてである。

まず1つ目に、企画づくりについてである。今回、フィールドワーク班として初めて企画作りに携わった。奈良公園への移動の際やゲーム中の安全確保だけでなく、子どもたちにできるだけ負担をかけず、かつ楽しめるようにして時間内に企画を収めることや、子どもたちの学びにつながるゲームや導入を考えるなど学ぶことがたくさんあった。直前に移動ルートの変更があり、予定していた時間に大幅に変更が出たにも関わらず、卒業生の方や先輩方がサポートしてくださ



ネイチャーゲームで集めた植物を発表する様子

り、予定時間内に終わらせることができた。ゲーム中は、時間を気にしなければならないにも関わらずネイチャーゲームの進行ばかりに集中してしまい、時間管理ができていなかった。次回以降、時間を気にしながら進行できるようにしたい。また、自分の担当している企画班だけでなく、他の班や運営の学生との情報共有や活動内容の確認をおろそかにしないことが、当日スムーズに活動を進めるために必要不可欠だと分かった。

2つ目に、運営としての動き方についてである。今回は学生の数が多く、特に運営班は1回生が多かったため、改善すべき点が多くあったと感じた。まず、企画班と運営班の間での情報共有が十分でなく、運営班側が何をすればいいか何回も確認するという場面があった。活動班と運営班の両方に入っている1回生として、自分の班の企画内容や仕事内容について同じ1回生ともっと情報共有しておくべきだった。また、次の仕事内容についての確認や連携を、子どもたちがいる場所で行ってしまった。子どもたちに活動の裏側の様子を見せるべきではないため、見えない場所で仕事の確認をすべきだった。しかし人が足りないときや、割り振られていた担当の人が他の仕事をしているときなどは、自分たちで臨機応変に対応できていた。

3つ目に、子どもたちとの関わりについてである。今回は活動班でなかったため、あまり子どもたちと関わるができなかった。班に入っていない学生として活動班の雰囲気を壊したくないという思いもあったが、子どもたちと関わるためにはもっと積極的に学生側から声をかける必要があったと感じた。フィールドワーク中に子どもたちに話しかけて意見を引き出す場面があったが、子どもたちが真剣に楽しんでゲームに参加してくれたため、学生側も楽しむことができた。劇のセリフとしてではなく、子どもたちとの自然な対話が生まれたことはよかったと感じる。

以上、3つのことについて主に学んだ。初めてのことにたくさん挑戦して、難しいことや大変なことがたくさんあった。しかしそれ以上に学ぶことが多くあり、子どもたちと過ごす楽しさや自分の至らなさについてより知ることができたため、参加してよかったと感じる。今回の反省や良かった点を活かし、次回以降の活動により成長した自分で参加したい。

守っていききたい活動

社会科教育専修3回生 仲村 幸奈

令和元年11月17日に、第3回集まれ！ESD子ども広場が開催された。今年度は、小学校3年生から6年生、幼稚園や子ども園に通う幼児が対象であり、私たちユネスコクラブにとって初めての試みとなった。私たちは、「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」をテーマに掲げ、自然遊びや昔の暮らし体験を通して、子どもたちに今の暮らしと昔の暮らしを比較することで昔の良さについて考えさせた。そして、今の生活に活かせる知恵や工夫を考えさせる企画を行った。

私は、本活動から3つのことを学んだ。1つ目に言葉で伝えることの難しさ、2つ目に組織で動くということについて、3つ目に本活動を行うことの意義についてである。

まず、1つ目の言葉で伝えることの難しさについてである。今回の「集まれ！ESD子ども広場」は、前年度と違い上回生が少なく、1回生が過半数を占めていた。そのため、事前研修を3回行い、本活動について知ってもらう機会を多く設けた。また、全員で作るということを意識し、全体の士気を上げるために、子どもと接するにはどうすればいいのか、そして当日の立ち回りや盛り上げ方についてなども伝えていった。しかし、言葉だけではイメージさせることが難しく、写真や動画を見せたりなどの工夫も行ったが、「伝える」ためにはやはり実際に見てもらうことが一番だと本活動を終えて強く感じている。私は「伝わらない」ではなく、伝えるためにはどうすればいいのかを考え、後輩たちに真似してほしい動きを早くから自分が行動に移しておきたかったと後悔している。

2つ目の組織で動くということについてである。本活動は、参加学生の数が多く大きな組織規模での活動となった。そのため、誰が司令塔なのか、誰を主体として動くのかという軸がぶれてしまう場面も見られた。企画内容を詰めることも大切ではあるが、まず参加学生の仲を深め、どのようにして進めていくのかを明確にし、組織を整理することが大切であったと感じている。当日何をすればよいのか分からない学生が多数いた事実を受けて、土台をしっかりと固めておくことの必要性を学んだ。

最後に、3つ目の本活動を行うことの意義についてである。本活動は、参加する子どもや学生両者がともに学ぶことのできる場所だと考えている。本活動の最後にあるESD勉強会では、子どもたちが「これから自分ができること」について考える時間がある。子どもたちは、私たちが想像している以上に考えをしっかりと持って発表してくれていた。私たち学生が驚かされることも多く、普段得ることのできない良い刺激をもらっている。学生は、子どもとの接し方などはもちろん、ESD



ESD勉強会の様子

という軸をもとに苦戦しながらも企画を作ること、企画力やESDの知識をさらに伸ばすことができる。また、全員で協力して何かを成し遂げるといふことの達成感を得ることもできる。私は本活動の準備期間中に、ユネスコクラブに所属して3年目にして初めてもがき苦しみ、辞めたくなるという経験をした。それでも、大好きな仲間がくじけそうになりながら、声を掛け合ってひたむきに前を向いている姿に私は何度も背中を押された。そして、全員で乗り越えた本活動は本当に素晴らしいものであった。最後に、先輩や後輩たちから掛けられた感謝の言葉、そして子どもたちからの「ありがとう」を聞いたとき、頑張ってたかったと心から思った。子どもたちの「勉強して疲れた、でも楽しかった」という声と表情を見られる場、学生が本活動を行う前よりも成長した姿と表情を生み出せる場である本活動は、これからも私たちに必要だと感じている。

以上、3つが主に学んだことである。これからもこの場所をなくさないように、さらに良いものにするために行動していききたい。

見つかったこれからの課題

社会科教育専修1回生 根本 優

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。本活動ではフィールドワークで奈良公園へ行き、ムクロジがどんなものであるのかを実際に見て触れ、ムクロジを使った洗濯体験を通して今の生活と昔の生活の長所と短所について考え、今の生活の短所をいかにして改善していくか、昔の生活の長所を基に考えた。また本活動では幼児を招き、ムクロジを使ったシャボン玉遊びで小学生と交流した。

本活動で学んだことは3つある。1つ目に子どもへの接し方、2つ目に子どもの安全確保、3つ目に裏方で支えることの難しさである。

まず1つ目に子どもへの接し方である。私は本活動が子どもと本格的に関わる初めての活動であった。そのためどのように話しかければいいのかわからず、話しかけるのをためらってしまった。話しかけることの何をためらってしまったのか考えてみると、面白い会話をしたり、場を盛り上げたりしようと思いつき過ぎていたことが挙げられる。思い込みすぎることによって表情がこわばってしまう。それにより、かえって子どもに警戒心を与えてしまうため、子どもに話しかけるときはどんな些細なことでも積極的に、子どもの反応も頼りにしながら会話を広げていくことが大切だと本活動を通して学んだ。

次に2つ目の子どもの安全確保についてである。本活動の事前研修にて、「活動中、顔は常に笑顔で頭の中では常に最悪の状況を想定しておく」ということを教わった。実際その場所ではどんな危険が潜んでいるのかを考えることは難しい。特に子どもは全く予測していなかった行動をすることもある。そのときにどのように声をかけたり行動を起こしたりしないといけないのか臨機応変に対応する力が必要になることが分かった。私はまだ先を見通す力と臨機応変に対応する力が不十分であることが本活動を通して知ることができた。

最後に3つ目の裏方で支えることの難しさについてである。今回私は運営班として活動した。運営班は本活動の進行を円滑に進められるようにサポートすることや本活動の雰囲気づくりが主な仕事内容であった。

まず本活動を円滑に進めていくためには自分の役割はもちろんのこと、これ以上に人手が足りてないところの応援や今の進行状況では何が必要なのかを常に考える必要があった。しかし実際は人に言われて気づくことが多く、周りを見ているようで実は全然見えていないことが浮き彫りになった。なぜ周りが見えていなかったのかと考えると、どこか人任せになってしまっていたことが原因にあると思う。そのため集中力が途中で切れてしまい、判断が鈍ってしまった。また雰囲気づくりについては前で誰かが話しているときに相槌を打ったり、子どもが退屈な思いをしないように子どもに積極的に話しかけたりすることが私の中では課題として残った。子どもに話しかけることについては先述したとおりであるが、相槌を打つことについては、本活動を行う前まで相槌を打つことで場の雰囲気がどれだけ変わるかを意識することがなかった。また前に立って話している人も返答があることによって気持ちに乗ってくる効果もあることが分かった。しかし本活動で私は積極的に相槌を打つことができず運営班としての雰囲気づくりに貢献できていなかった。

以上、3つのことについて主に学んだ。本活動を通して子どもと関わることはとても繊細なことだと思った。本活動は自分自身に何が足りていないのかを考える貴重な経験となった。



ドキドキしながらの会話

本イベントを通して得た課題

社会科教育専修1回生 野村 知優

令和元年11月17日、奈良教育大学キャンパスとその周辺で第3回集まれ！ESD子ども広場が行われた。本イベントでは、「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」というテーマのもと、小学生11人、幼児7人の子どもたちとともに活動を行った。主な活動内容として、まずフィールドワークや昔の生活体験を通して、ムクロジが昔は洗濯の洗剤として使われていたり、シャボン玉の液として使われていたりしたということを知り、体験した。それらの活動を通して今の生活の問題点を考え、未来に向けて改善していくために自分たちは何ができるのかを子どもたちと本イベントを通して考えた。

今回の本イベントで学んだことは3つある。1つ目に子どもの気持ちを考えること、2つ目に子どもへの対応の仕方、3つ目に周りをしっかり見て共有することの大切さである。

まず1つ目に子どもの気持ちを考えることについてである。私は、本イベントに活動班として参加した。子どもたちが初めて班に参加したときは、たくさん話して盛り上げ、緊張をほぐすことができた。しかしフィールドワークの活動では、奈良公園まで歩いている道中どのように声掛けをしてあげればよいのか分からず、無言の時間ができてしまった。子どもにとっては、無言の時間はつまらない時間であり、ただ歩くだけでは疲れてしまう。子どものことを考えて、何でもいいので話しかけなければいけなかったと思った。学校までの帰り道は、些細なことを話しかけたとしても子どもたちがさらに話題を広げてくれたので、何でもいいので話しかけてあげることが大切だということを知った。



奈良公園でのフィールドワーク

次に2つ目に子どもへの対応の仕方についてである。本イベント中、前で立って話している人がいるときに子どもが話しかけてきることがあった。そのときに、しっかりと注意すべきなのか分からず話しかけてきた子どもに合わせてしまった。しかし、イベントの最初の時間ときに「聞くときは聞く、話すときは話すなどしっかりメリハリをつける」という約束をするということを知っていたので、そのことを子どもに言わなければいけなかったと思った。このイベントだけでなく、他の機会でもメリハリをつけることは大切なことであるから、自分たちが優しく「今は聞く時間だよ」と声をかけてあげなければいけないと本イベントを通して新たに学んだ。

最後に3つ目の周りをしっかり見て共有することの大切さについてである。本イベントの休憩の最中、トイレに行く子、話をしている子と班の子どもたちがばらばらになってしまい、学生リーダーがおらず子どもだけが部屋にいる時間を作ってしまった。このことから、休憩時間などで、トイレに行くといったような子どもたちがばらばらになってしまう時間のときは、子どもがトイレに行ってしまう前に必ず全員にトイレに行くか聞き、学生リーダーの3人で分担して、トイレについて行ってあげる人、その場に残る子についてあげる人と学生リーダーの中で共有し、分担することが大切だと思った。そして、常に周りを確認しながら行動し、学生リーダーが常に子どものそばにいるか見ながら行動することを心掛けなければいけないということを知った。

以上、3つのことについて学んだ。本イベントを通して子どもに接するときの課題がたくさん見つかった。特に3つ目の周りをしっかり見て共有し、分担するというのは、一番心掛けなければいけないことである。常にこの意識をもって子どもたちが楽しく、何事もなく帰宅することができるようにこれからの活動に活かしていきたいと本イベントを通して感じた。

子どもと関わることで感じた楽しさと難しさ

音楽教育専修1回生 橋本 茉奈

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回は、「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」をテーマに掲げ、奈良公園でのフィールドワークや昔の生活体験を通して、昔の生活と今の生活を比較し、今の自分に何ができるのかを考えさせる企画を行った。当日私は、活動班の学生リーダーとして子どもたちと共に活動した。

私が本活動で学んだこと、感じたことは3つある。1つ目は子どもたちとの接し方、2つ目は周りをよく観察することの難しさ、3つ目は状況に応じた対応についてである。

1つ目の子どもたちとの接し方については、今回最も考えさせられたことである。当日は、まず私自身が子どもと同じ目線で楽しむことを目標としていた。しかし、いざ関わってみると積極的に話しかけてくれる子どもは少なく、どのように声掛けをするかが難しかった。また、初めの段階で心を開いてもらえず、あまり会話がない時間を作ってしまったことは反省点である。原因として大学生自身に緊張があり、子どもにとって話しやすい環境が作れていなかったと考える。自分では目線を合わせたり、一緒に歌ったりして親近感を持ってもらえるように心掛けていたつもりだったが、全く足りていなかったのだと痛感した。この反省を二度と繰り返さないためにも、初対面でもすぐに心を開いてもらえるような方法を探す必要があると思った。



活動班1班の決めポーズ

2つ目の周りをよく観察することの難しさについてである。オリエンテーションやESD勉強会で、前で話している人がいるのに話しかけてきたり、話を聞かずに遊んだりしていた子どもがいた。私はそのときに「前を向いて話聞こう」と注意した。すぐに前を向いてくれたが、何か伝えたいことがあったのかと不安になる場面もあった。反対に、体調不良など本当に伝えたいことは子どもが隠そうとする場合もあるため、小さなきっかけや言動を通して学生から気づいてあげられるように、子どものことをよく観察しておくことが大切だと感じた。

3つ目の状況に応じた対応についてである。当日、スケジュール通りに予定が進まなかったとき、先輩方がその場に応じた対応をなさっていた。どうにかして全てのプログラムを行おうとするのではなく、「やらない」という選択肢を持つことで困ったときに焦ることなく臨機応変に行動できるのだと気づいた。もし私が同じ状況になったとき、時間を無視して進めるのではなく、先輩方のような進め方ができるように日頃から柔軟な考えを持つことを心掛けたい。

本企画を通して、貴重な経験をすることができ、先輩方の柔軟な対応や子どもへの声掛けなど多くのことを学んだ。活動班の学生リーダーとして1日を子どもと共に過ごしたことで、子どもを預かることへの責任、葛藤を感じ、数えきれないほどの反省点や発見があった。この経験を忘れず、今後の活動に活かせるように、たくさん学んでいきたい。



昔の洗濯体験の様子

本企画を通して、貴重な経験をすることができ、先輩方の柔軟な対応や子どもへの声掛けなど多くのことを学んだ。活動班の学生リーダーとして1日を子どもと共に過ごしたことで、子どもを預かることへの責任、葛藤を感じ、数えきれないほどの反省点や発見があった。この経験を忘れず、今後の活動に活かせるように、たくさん学んでいきたい。

幼児対象企画のやりがい

家庭科教育専修3回生 畑下 さつき

2019年11月17日、奈良教育大学にて第3回集まれ！ESD子ども広場が開催された。今回のテーマは「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」であった。本企画では、小学3年生から6年生に加え、幼児7名と共に、テーマにそって1日の活動を行った。幼児を対象とした企画班のリーダーとして、今回の活動に携わった。今までは、小学生、中学生を対象とした活動であった。そのため、幼児との企画を進めるうえで、考えさせられることは多くあった。

本企画で学んだことを2つの視点でまとめたいと思う。1つ目は大学生と幼児が関わる際の配慮について、2つ目は小学生と幼児の交流の際の支援についてである。

まず、1つ目の大学生と幼児が関わる際の配慮についてである。幼児を対象とした企画が、小学生のものとは違う点は、活動内容に学びを求めるのではなく、大学生と一緒に遊び感覚で、本企画の楽しさを知ってもらうことである。さらに、保護者同伴とはいえ、初めての環境で多くの大学生に囲まれると、緊張してしまい、活動に参加し難い子どもも出るのではないかと想定していた。それを踏まえ、オリエンテーションの始まりでは、歌に合わせて体を動かしながら学生の自己紹介をすることとした。最初の活動であるため、子どもたちは見ているだけになってしまうのではないかと心配していたが、皆で大きな声と一緒に歌うことができ、学生との距離を縮められた。このアイスブレイクが1日の活動を楽しんでもらえるきっかけになったように思う。また、小学生と合流してからしゃぼん玉遊びをするため、幼児のみの活動の際に、しゃぼん玉遊びをテーマにしたペープサートも行った。しゃぼん玉液がなくてもしゃぼん玉ができることを幼児に伝えるのは難しいと思っていた。しかし、ペープサートで動物たちの会話から知ってもらい、としたことで興味をもって聞いてもらうことができた。その後の活動では、幼児の口から「ムクロジの実でできている」ということを聞くことができ嬉しかった。



テーマソングをきく幼児たち

次に、2つ目の小学生と幼児の交流の際の支援についてである。小学生と合流するタイミングが休憩時間ということで、なかなか馴染めないのではという不安があった。そのため、小学生には、幼児が部屋に入ってきたら、自分の班の子を呼んでもらう

よう事前に伝えていた。小学生の部屋に移動するとき、幼児たちは緊張した表情であったが、小学生のみんなの元気な呼びかけから、安心したようにみえた。また、小学生との活動の一つにポシエット作成があった。幼児は事前に作成しており、小学生に作り方を教えてあげることになっていた。また、幼児に対しては小学生との活動前に、小学生に作り方を教えてあげてね、と伝えていた。その声掛けがあったため、班活動では、積極的に小学生に話しかけ作り方を教えることができていた。しかし、場が変わり、なかなか話し出せない幼児もいた。その幼児に対しては、小学生が、「～ちゃんのポシエットかわいいね。見せてほしいな。」と声をかけてくれていた。その一言から、小学生との班に馴染み、その後の活動では笑顔で楽しんでいる幼児の姿が見られた。合流して最後の活動では、小学生に本活動のテーマソングを歌ってもらいさよならする形をとった。この流れについては、事前から昔の生活体験班と打ち合

わせをしてしっかりと情報共有を行っていた。そのため、写真撮影が終わった後スムーズにお別れの歌に入ることができた。このことから、タイムスケジュールが違い、途中で合流という活動形式の場合は、小学生、幼児それぞれと関わる学生同士の企画に関する情報共有、その場の連携がとれていることが重要であるとわかった。また、子どもたちに今後の活動の流れや、何をしてもらいたいかなどを伝えるといった支援を行ったため、戸惑うことなく幼児と小学生のより良い交流ができたのだと思う。

私は、上記に述べた2つのことについて主に学んだ。幼児の参加を募り、一緒に活動するというのは初めての試みであったため、企画を考えるうえで悩むことも多くあった。しかし、本活動当日には、子どもたちの楽しんでいる姿を見られ、幼児との企画を作ることに對するやりがいを感じることができた。「楽しかった」「また来たいな」そう言ってくれた子どもたちのおもいを大切に、今後も幼児を対象とした企画・活動が続いていくことを願っている。



1日の活動の思い出を絵にかく様子

第3回生まれ！ESD 子ども広場を通じて

国語教育専修2回生 林 祐希

令和元年11月17日、奈良教育大学において第3回生まれ！ESD 子ども広場が開催された。対象は小学3年～6年及び4～6歳児の者であり、企画や準備は奈良教育大学の学生が行った。本イベントでは、無患子という木の実を用いて洗濯やシャボン玉遊びを行う活動を通して、現在の暮らしりと昔の暮らしりを比較して考え、自分の意見を持つことを目的とし開催された。また、幼児に関しては、小学生とは集合・解散の時刻は異なったものの、シャボン玉遊びの前後で交流し、年齢差に関わらず仲を深められた。

私が第3回生まれ！ESD 子ども広場で学んだことは3つある。1つ目に子どもへの接し方、2つ目に協力しあうことの大切さ、3つ目に危機管理の大切さである。

まず1つ目に子どもへの接し方についてである。私は当日の担当が幼児の対応だったのだが、正直、なかなか馴染みがないこともあって、私の知っている一人の子どものイメージで当日に挑んでしまった。集まった子どもたちは小さいながらも当然個性豊かで元気の良さも好きなものもそれぞれに違っていた。姿勢を低くする、「教えてくれる？」というふうに話しかけるなどの当たり前のことを繰り返しているうちに全員と話せるようになったことは、私のなかで子どもの生の反応を見られたという点で大きな成果だ。しかし、ほかにも工夫できるところはないか考えていくことが今後の課題ともなった。また、同回生で他班のリーダーをしていた友人と無患子を用いたシャボン玉遊び体験のときになかなか泡立たない無患子の液に市販されているシャボン玉液を入れるか否かの話をしたときには、ものを通しての関わりにも繊細な心遣いが必要だと学んだ。

次に2つ目は協力しあうことの大切さである。班内の活動において、なかなか空きコマが被らなかったり昼休みに他の用事があったりして集まれなかったことは個人としては本イベントで最大の反省である。ペープサートの台本を作ったり、前日に物品に関して協力したりはできたものもつとその場に行けなくても考えられたことはあったと思う。しかし、リーダーの心配り、後輩の活躍によって本イベントが成功に終わったときには、班員に大いに感謝するとともに次は今回のリーダーのように動きたいと思えた。また、他班に属する同回生の友人と話しあうことで他班も一生懸命企画のために尽力していることが再認識されて、第3回生まれ！ESD 子ども広場という企画としての成功を考えて動けたと思う。

最後に3つ目の危機管理の大切さである。春日大社に向かうということで道中の安全を考えて担当班がルートを選定し、何度も確認していたのだが、出発する側の門を開けることができない旨が前日に判明し、全員が動揺した。ルート自体は変更したが、何度も確認していても想定外というのは出てくるのだなと感じた。またけがなどについても応急処置を含め、事前研修で確認していたことで意識ができ、こういうことが起きないかなど常に考えられた。

以上、3つのことについて主に学んだ。大枠はうまくいったものの、個人としては反省点が多くある。子どもと勉強面以外で実際に関わる貴重な体験ができたことを踏まえ、今回のことを必ず来年度につなげたい。



絵を描く子どもたちと見守る学生

第3回集まれ！ESD 子ども広場から学んだ3つのこと

家庭科教育専修1回生 福永 真咲

令和年11月17日、奈良教育大学で第3集まれ！ESD 子ども広場が行われた。本活動では、昔の生活の良さの中から今の生活の問題点をとらえ、未来の生活のために自分には何ができるか考え行動する意思を持たせる内容を行うことで子どもたち自身が持続可能な社会について考えることをねらいとしている。その中で本活動はムクロジの実を使った洗濯体験やシャボン玉遊びを通して昔の生活に実際に触れることから学びを深めていった。

今回の活動で学んだことは3つある。1つ目にESDについて、2つ目に子どもについて、3つ目に自分についてである。

まず1つ目のESDについてである。今回の活動に参加する前に大学の授業でESDについて学んでおりESDの概要は知っていたが、実際の生活とのつながりや昔と今の生活のメリットとデメリットをESDと関連させて考えたことがなかったので、自分の知識を深められるよいきっかけになった。ムクロジについても、私自身も初めて知ったので、子どもに伝えるだけでなく一緒に学ぶことができた点はとてもよかったと思う。

次に2つ目の子どもについてである。今回の活動は私にとって子どもと長時間かかわる初めての活動だったので、事前研修の段階や本活動の序盤の頃は子どもとの距離感がつかめず、声掛けなどもできなかった。しかし子どもと長い時間ともに過ごすことで、徐々に子どもとの距離が物理的にも精神的にも縮まったことを自分で感じることができた点がとてもうれしかった。

最後に3つ目の自分についてである。自分は今回の活動に参加するまで、あまり自発的にたくさんの活動に参加してこなかった。そのため経験も知識も全くないままで当日を迎えることになり、はじめは不安と緊張でいっぱいだったが、子どもたちと実際に触れあっていく中で自分の緊張も徐々にほぐれていった。さらに本活動に参加する前までは子ども、特に幼児とかかわることに勝手に苦手意識を持っていたが、子どもと一緒に遊んだり学んだりすることの楽しさを心の底から感じるすることができた。これらの経験から、本活動に参加し完全に学生主体のイベントを達成することによって自分の可能性を知り、それを広げることができたので自分を見つめなおすよい経験ができた。

以上、3つのことについて主に学んだ。私は今回の活動がユネスコクラブで最初の活動であったこともあり、たくさんの貴重な経験ができたとともにたくさんの反省点もあった。その中で最も反省すべき点は、子どものいるところで疲れを出してしまったことである。子どもにとってはたった1日の貴重な学び、遊びの場であるのにもかかわらず、それをサポートする側の私ができる行動はもっとあったと思う。その時々自分の状況だけではなく、周りのことにももっと目を配って最善の行動をとるということが今後のユネスコクラブでの私の目標である。さらに私は本活動に対して、ほとんど当日の子どもとの触れ合いでしか関わっていないが、たくさんの方がとてもたくさんの時間をかけて作り上げているものであることが今回参加してわかった。このことから、実際に自分もたくさんの人と協力し、一から企画を作り上げていく達成感を味わってみたいとも思った。このような貴重な経験ができたことに誇りをもって、今後の活動にも積極的に取り組んでいきたい。



第3回集まれ！ESD 子ども広場
集合写真

「第3回集まれ！ESD子ども広場」から学んだこと

美術教育専修1回生 松村 果林

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD子ども広場が行われた。本活動では小学生11人、幼児7人、計18の子どもたちが参加した。また、この活動では「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」というテーマを掲げ、昔の生活の良い点から今の生活の問題点を捉え、実際に自分にできることは何かを子どもたちに学んでもらうことで持続可能な社会について考えることを目的としている。本活動に参加するユネスコクラブの学生はこれらの目的を達成するため、オリエンテーション班、フィールドワーク班、昔の生活体験班、幼稚園児班、運営班の5つの班に分かれて行動した。そのうち私は幼稚園児班として本活動に参加した。

本活動で学んだことは3つある。1つ目に企画をし、実行することの大変さ、2つ目に導入部分のアイスブレーキングの大切さ、3つ目に子どもの心を開くことの難しさについてである。



アイスブレーキングの様子

考えることも大切だと思った。しかし、どうしても頭では想定できないこともあると思うので、実際にリハーサルを行うことも重要だと感じた。さらに、企画をしっかり把握していると急な変更にもしっかりと対応できることを学んだ。

次に2つ目の導入部分のアイスブレーキングの大切さについてである。アイスブレーキングとは、初対面の人どうしが打ち解けやすくするために行うレクリエーションを意味する表現のことである。本活動でも最初のプログラムでレクリエーションが行われ、そのおかげでゲームを通してすぐに子どもたちと距離を縮めることができた。初対面でも自然とコミュニケーションがしやすく、また、次のプログラムの内容と繋げることでより円滑にプログラムを始められるという役目もある。これらの点からアイスブレーキングの大切さを学んだ。

次に3つ目の子どもの心を開くことの難しさについてである。私は幼稚園児班として参加したので、幼児と多く関わった。小学生に比べ幼児は控えめな子や場に慣れない子が比較的多く、慣れてもらうための会話が難しく、コミュニケーションの仕方に工夫がいると思った。子どもたちが答えやすい会話の内容を前もって考えたり、気を引くような遊びを考えたりする必要があると感じた。また、子どもたちのそばについて、不安にさせないことも大切だと思った。



幼児とポシエットを作る様子

以上3つのことについて主に学んだ。これらのことを学び、本活動に参加することで子どもたちだけでなく、私自身にとっても今後に生かせる良い経験になった。また、企画に参加するのではなく、作っていく側の過程も知れてとても勉強になった。

私のしゃぼん玉体験

特別支援教育専修1回生 南方 玲美

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。オリエンテーションから始まり、フィールドワークに昔の生活体験、幼児との交流に勉強会などが実施された。

今回の活動で学んだことは3つある。1つ目に企画の事前準備の大切さ、2つ目に企画実行の難しさ、3つ目に運営班の動きについてである。

まず1つ目に企画の事前準備の大切さについてである。他の班との兼ね合いなどもあったため、どこまでを自分たちが担当するのか把握できるのが遅かった。また、昔の生活体験のプログラム時の洗濯体験にて何を洗うのかなどぎりぎりまで決められていないことがたくさんあり、なかなか進まずに当日を迎えてしまった。もっと前から動き出していれば他の班のようにプレのときから具体的な内容を行って、しっかり準備したうえで当日を迎えられていたと思う。また、できればしゃぼん液を入れずに無患子だけでしゃぼん玉をしたかったが、実験不足だったのか原因はわからないが不出来なものしか作ることができなかった。無患子の量の調整などもっとしゃぼん液づくりを試していれば市販のものを混ぜずにできたかもしれないと考えると準備不足だったと思う。

2つ目に企画実行の難しさについてである。子どもたちの前でたくさん話すことは初めての体験だった。緊張したが説明を頑張って覚えたので間違えることなく最後まで話すことができた。しかし、台本にない反応や、洗っている間の時間、他企画との兼ね合いでできた新コーナーなどには全然対応できなかった。また、すぐに飽きてしまうのではないかと不安に思っていた洗濯をあんなに一生懸命してくれるとは思わなかった。決めつけは良くないと学ぶことができた。

最後に3つ目の運営班の動きについてである。運営班は与えられた仕事を終えてすることがない時間が幾度かあった。そこでやることを見つけられなかったこと、何をすればいいか聞けなかったことが1番の反省点だ。手持無沙汰になったときに学生同士で固まって盛り上がりってしまった。子どもたちの大切な時間と命を預けてもらっているという自覚が足りなかったのだと思う。

以上3つのことについて主に学んだ。反省を踏まえて事前準備では問題点を一つひとつ見つけ対処すること、企画実行ではいろんな場所でたくさん経験を積み、自信を持つことによって堂々と前に立つこと、運営班では周りをよく見ることを大切にしたい。また、本活動は子どもたちが楽しく学ぶためのものだという根拠に行動できるように意識したい。私自身は反省しないといけないことばかりであったが、準備から本番まで楽しく活動することができた。活動の中でも特に、子どもたちが楽しそうに洗濯やしゃぼん玉をしている様子を見てとても嬉しかったのが印象に残っている。自分なりに良かった点も反省しないといけないと思った点もしっかり覚えておいてこれからの活動に繋げていければ良いと思う。次回は私も子どもたちを楽しませることができるようになりたい。



洗濯したタオルを見せる2班

幼児対象の企画・運営での学び

英語教育専修3回生 櫛 乃里花

令和元年11月17日、奈良教育大学および春日大社表参道周辺地域にて第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。今回は、前年より対象学年を下げたほか、新たに幼児を対象とする活動も実施した。私は、その幼児を対象とする企画班（以下幼稚園児班）の一員として企画と運営に携わった。

本活動の中で私が感じたことを3つの観点からまとめる。1つ目に幼児と関わるうえの配慮について、2つ目に小学生と幼児の交流について、3つ目に保護者対応についてである。

1つ目の幼児と関わるうえでの配慮についてであるが、これは企画から運営の一連の流れを通して感じた。学びの提供を重視する小学生対象の他の企画班とは違い、幼稚園児班では幼児がリラックスして楽しめる空間づくりに重きを置いた。そのためには幼児の意識を惹きつけ、活動に興味を持たせる必要があった。特に今回のメインの活動の1つであったペープサートでは、幼児が集中して鑑賞できるように声に抑揚をつけたり、話すスピードを落としたりした。その結果、幼児にペープサートの内容をしっかりと印象付けることができた。一方で当日に気づいた注意点もあった。例えば、幼児が理解できているかどうかを確認する際に、「今の話聞いてた人？」と学生が聞く場面があった。しかし卒業生の先輩から、それでは怒っているような印象を与えてしまうと指摘を受けた。同じ場面でも、「今の話わかった人、手を上げて！」と声かけすれば幼児を萎縮させることがなく、また話し手も指示が通っているか一目で確認できるとのことだった。幼児と接する際の言葉選びやコミュニケーションの難しさを感じたとともに、来年度以降それらに配慮して事前準備をすべきだと感じた。

2つ目の小学生と幼児の交流についてであるが、本イベントでは小学生と幼児が同じ空間で活動を行う時間があつた。私は、大学生をはじめとする大人や自分よりも背丈の高い小学生に対し、幼児が戸惑うのではないかと懸念していた。しかし、活動中は積極的に交流する姿が見られ、子どもたちが互いに良い影響を与えあっていると確信した。特に幼児が小学生にポシェットの作り方を教える場面は、幼児にとってそれまでの活動を発信する場となり、小学生はそれに耳を傾けたり質問したりして、両者の間で自然なコミュニケーションが生まれていた。来年度以降も幼児を本イベントの対象とするならば、小学生と幼児との交流を今回のような形で継続していきたい。

3目の保護者対応についてであるが、これは幼児と小学生との間で違いが見られた。幼児の場合は、保護者の方が一日を通して参観して下さっていたため、常に見られている緊張感と、いざというときすぐ相談できる安心感があつた。例えば、風邪気味で参加して、途中で高熱を出してしまった幼児がいたが、活動を継続するかどうかをすぐに保護者の方と相談することができた。また、直接見ていただくことで保護者の方にも活動の雰囲気を体感していただけたと思う。一方小学生の場合は、常に保護者の方が参観されているわけではないため、イベント終了後に一日の様子を伝えることが学生の重要な役割である。怪我や体調不良等について詳細に伝える責任があることはもちろん、保護者の方の多くは本イベントを通して子どもが学校とは違う学びを得たりそれによって成長したりすることを期待して下さっている。保護者の方が直接見られない分、子どもの頑張りや成長を見逃さず端的な言葉で伝えるべきである。幼児と小学生の保護者対応を比較することで、それらが大きく異なることを学んだ。



保護者の方が見守る中での活動

以上のように、私は幼稚園児班として本イベントに関わったことで多くの学びを得ることができた。来年度以降も幼児対象の企画を継続していけるように、今回の成果や反省を引き継ぎたい。

第3回集まれ!ESD 子ども広場で得た多くの学び

理科教育専修1回生 柳川 莉沙

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ!ESD 子ども広場が行われた。本活動は、無患子(ムクロジ)でシャボン液を作って遊んだり、洗濯板と桶を用いて洗濯を行ったりといった、昔の生活を体験することを通して、今の生活の問題点や改善点を考え、改善していく動機付けを目的とした。企画から運営まで全て学生による手作りである。11人の小学生と7人の幼児の参加者とともに、様々な体験を通してESDについて学ぶ活動をし、学生にとっても非常に良い経験になったと思う。

本活動で学んだことは3つある。1つ目にアイスブレイクの大切さ、2つ目に運営の動きを考えて行動するべきだったこと、3つ目に疲れたときは我慢せずに休むことである。

まず1つ目にアイスブレイクの大切さである。本活動で私は、初対面で緊張している子どもたちの心と体を解きほぐすため、オリエンテーションのゲームを企画して行う役割を担った。企画を進めていくうえで、先輩方にゲームの順番の意味を教わったが、緊張をほぐせるように徐々に子ども同士の触れ合いが多くなるゲームにしていくことがとても参考になった。ゲームはいくつか種類分けがあり、学生一人が前に立ってみんなで声や動きを揃えて一体感を出す1対全体で行うゲーム、たくさんの人と出会って触れ合う全体で行うゲーム、グループで集まったり協力したりして仲を深めるグループのゲームがある。それらを1対全体で行うゲーム、全体で行うゲーム、グループで行うゲームの順に行うと子どもの緊張を徐々に和らげているということ学んだ。その他の活動が楽しくできていたのもオリエンテーションのゲームがあったからこそだと感じる。

2つ目に運営の動きについてである。子どもの人数が少なかったこともあり、多くの1回生が運営班として動いた。人数が多い故に、手持ち無沙汰になってしまう瞬間が度々あった。そのようなとき勝手に休んで友達と喋るのではなく、何をすべきなのかももう少し考えるべきだったと思う。

最後に3つ目の疲れたときは我慢せずに休むことについてである。終わった後の振り返りで、1回生の多くは後半に疲れが顔に出ていたと先輩方に指摘された。子どもは学生たちのことをよく見ており、疲れている様子にはすぐに気が付く。子どもが全力で楽しむためにも、学生は疲れをなるべく見せないようにし、もし本当にしんどいときは我慢せずに休憩するということを徹底するべきだった。このことは自分の意識によって改善できる課題だと思うので、気を付けて行動していきたいと思う。

以上、3つのことについて主に学んだ。初めて参加した本活動では、周りの仲間や先輩方から多くの刺激を貰った。子どもと接することは大変だと改めて実感するとともに、自分が将来教師になったときの課題も知ることができた。子どもと一緒に楽しく学ぶ本活動で得た経験を大切にしたいと思う。



オリエンテーションの様子

初めての挑戦

特別支援教育専修1回生 山口 春菜

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。本活動は無患子を使った洗濯体験やシャボン玉遊びを通して昔の生活と今の生活を比較して、今の生活を改善していくために、子どもたちが自分で考え、自分の意見を持つことを目標にした企画である。小学生は、アイスブレイクを行ったのち、無患子のある場所を発見し、身近な自然に触れるためのフィールドワークを行った。その後、無患子を使って作った洗剤を用いて昔の洗濯を学び、幼児とシャボン玉で遊んだ。幼児と別れたのち、ESD勉強会を行った。幼児対象のプログラムでは、アイスブレイクを行ったのち、無患子でシャボン玉ができることを教えるペープサートを行い、小学生と無患子を使ってシャボン玉遊びを行った。その後、本活動で心に残ったことについて絵を描いてもらうという一日の振り返りを行った。

本活動で学んだことは、3つある。1つ目に全体的な計画を立てることの大切さ、2つ目に周りとの協力、3つ目に主催者側も楽しむことである。

まず1つ目に全体的な計画を立てることの大切さについてだ。一つのものを完成させるためにはいつまでに、何を仕上げるかをしっかり決めておかなければ期限までに仕上げることは困難である。今回私が所属した幼稚園児班では、制作に取り組む時間が遅く、直前で詰め込んでしまった。そのため、十分に練習ができなかったと感じた。また、直前に準備を詰め込むことで少々無理をしてしまっていた。したがって、直前にも余裕を持ち、練習も十分に行えるようにするためには、最初の段階からいつまでに、何を作り終えるなどの計画を立てる必要があると学んだ。

次に2つ目の周りとの協力についてだ。一つのことを成し遂げるには、それぞれがばらばらに計画するのではなく、互いの状況やどのような考えを持っているのかを話し合うべきである。なぜなら、今回の企画では、閉鎖的に活動を進めていたように思うからだ。例えば、タイムスケジュールが連続する他の企画班への引継ぎがしづらかった。特に、幼稚園児班は別室で活動を進めていたため、幼児と小学生が合流する際、自分で想定していた合流の仕方とは異なっていたため少々困惑してしまった。そのため、合流の仕方などは事前にもう少し確認をしておくべきだったと感じた。したがって、一つのことを複数人で成し遂げる際、自分だけで決めつけるのではなく、積極的に他の人の意見や考えを聞き、自分の意見も述べながら決めることが大切であると学んだ。

最後に3つ目の主催者側も楽しむことについてだ。本活動の研修のたび、主催者側の私たちが楽しまなければ、子どもたちも楽しくはならないと言われてきていた。このことについて理解はしていたが、実際当日になってみると、練習が不十分なことから本当に楽しんでもらえる



無患子を用いた昔の洗濯体験

のかという不安が出てきてしまった。そのため、午前中から来てくれていた幼児の前で少し不安な顔をしてしまった。また、本活動の当日まで実際に幼児と関わったことが数えるほどしかなく、関わり方が分からなかったことから、少し戸惑い気味になってしまっていたように思う。そのことから、幼児も初めての場所で自分より大きい学生に囲まれてとても緊張していたはずなのに、その緊張を助長してしまっていたように感じた。その後の他の学生と遊んでいる様子を自分も一緒に遊びながら観察していると、子どもは自分が興味を示すことや楽しんでいることに共感を得られると、さらにそのことについて楽し



幼稚園児班 さよならの集い

そうにしてくれることが分かった。共感を得られるとうれしい、楽しいと思うことは今までの体験から、子どもたちだけでなくどんな人にも当てはまることだと考えた。さらに、人は何かを楽しむとき、誰かが楽しそうにしていることに対して興味を持つことから入る。したがって、自分が主催者側に立ったときや、何かを楽しんでもらいたいときはまず、自分たちはこれをしていて楽しいということを参加者に分かるように自分たちから楽し

しむことが大切であると学んだ。

以上、3つのことについて主に学んだ。全体の見通しをつけ、周りの状況を理解する。また、主催者であることに自覚を持ち、参加者の気持ちを上げる努力をする。今後、本活動だけではなく、様々な活動や普段の生活からもこれらのことを意識していきたい。

最大の挫折と最高の仲間と

社会科教育専修2回生 山本 健太

令和元年11月17日、奈良教育大学及びその周辺地域において、「第3回集まれ！ESD子ども広場」が行われた。本活動のテーマは「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」である。奈良県内の小学生11人がオリエンテーション、フィールドワーク、昔の生活体験、幼児7人との交流、ESD勉強会などの企画を通して、昔の生活と今の生活を比較しながら持続可能な社会のために自分たちにできることとは何かを考えた。

私は当日、司会という非常に責任の重い役割を任せていただいた。そこで本活動を通じて感じたことや学んだことを3つにまとめたいと思う。1つ目に人前に立つことの難しさ、2つ目に見通しをもって動くことの重要性、3つ目にユネスコクラブという組織についてである。

まず1つ目の人前に立つことの難しさであるが、これは私が本活動を通じて最も感じたことである。司会を任せてもらうことが決まったとき、正直なところ不安しかなかった。前回、前々回の本活動で先輩が完璧に司会をこなしている姿を見ていたため、自分にはそこまでできないと思ってしまったからである。それからは本番に失敗しないように何度も何度も司会の原稿を書き、練習していった。そうしていくなかで、今までの経験もあることから、どこかで「自分はできる」と思いこんでしまった。しかし、当日の私の司会は大失敗であった。緊張して思うように言葉が出ず、周りを見る余裕がなくなってしまう、前に立つことに恐怖さえも感じるようになった。私の今までの人生の中で、間違いなく初めての経験でもり、大きな挫折感を味わった。そして今回、私には「自信」が足りていなかったことに気づいた。本当に私が前に立ってよいのか、先輩方と比べてまだまだ未熟な私でよいのか、そんな弱気な思いでいたため、自信を持てていなかった様子が当日現れてしまったのだと思う。しかし、この経験は、前に立った自分しか得られないものである。今回の経験を糧に、次に前に立つ機会があれば自信をもって立てるようにしたい。

2つ目に、見通しをもって動くことの重要性についてである。本活動ではあらかじめ決められたタイムスケジュールに沿って活動を進めていく。しかし、私は当日焦りからか、余裕がなくなり目先の活動のことばかり考えてしまっていた。本来であれば、1手先、2手先の活動を完璧に把握し、見通しをもっておくべきであった。見通しをもって動くことで、自分も余裕をもって動くことができる。見通しをもって動くことの重要性を学ぶことができた。

3つ目に、ユネスコクラブという組織についてである。ユネスコクラブは、部員が100人を超える大きな団体である。本活動は、約50人の学生が関わってくれた。今回、私はこの活動を通して、ユネスコクラブは自分を高めてくれる場所であると再認識することができた。個性を持った学生が集まり、お互いに刺激しあいながら成長することができる、最高の仲間が集まった場所がこのユネスコクラブなのだ気づいた。

今回、私は最大の挫折と、最高の仲間という2つの宝物を手に入れることができた。この貴重な経験と学びをもって、個人的に大きく成長していきたい。



司会をつとめる

学びの広場 集まれ！ESD 子ども広場

英語教育専修1回生 山本 幸穂

2019年11月17日、次世代教員養成センター2号館で、第3回集まれ！ESD 子ども広場が行われた。今回の活動では、「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」というテーマをもとに、小学生にムクロジの実を使って洗濯させたり、幼児と一緒にムクロジで作ったシャボン玉であそんだりし、昔の生活の長所と短所を学ばせた。そして昔の生活と現在の生活を比較し、私たちが将来のために見習うことのできる暮らしの工夫について学習した。私は当日、運営班として参加した。運営班の役割は、小学生と幼児が安全に活動できるように注意を払いながらも、楽しく学ぶことができるような雰囲気づくりである。

今回の活動を通じて学んだこと、感じたことを3点述べる。第1に子どもとの接し方について、第2に視野の広さについて、第3に雰囲気づくりの大切さである。

第1の子どもとの接し方についてだが、私は小学生と間近に接する活動は今回が初めてであった。活動が始まる前から運営班として活動班をサポートしていくためには、子どもたちとどのように関わっていくべきか、どのように活動に参加していくべきか不安に感じていた。しかし、本番では奈良公園でネイチャーゲームをしている小学生と関わることができた。どのように声をかければよいのかわからなかったが、声掛けをすれば子どもたちもそれに応えてくれることがわかり、今後の活動に生かせる良い経験になった。また、オリエンテーションでは運営班もゲームに参加して、子どもたちと一緒に楽しむことができた。次の企画では活動班と運営班のどちらに入っても子どもたちと積極的に関わられるように、今回学んだことを大切にしたい。

第2に、視野の広さについてだが、今回の活動で自身の視野の狭さを実感した。今回は前日や当日に変更されたことも多いうえに、小学生班と幼稚園児班のタイムスケジュールが同時進行になっていた。私は、自分の役割を果たすことに加えて、今どこに人が足りてないのかをきちんと把握



植物を探す子どもたち

し、何をすればよいのかを考えて動くことができなかつた。今回の反省を踏まえて、次回の活動では積極的に動けるようにしたい。

第3に、雰囲気づくりの大切さについてだが、今回の反省点の1つとして、場を盛り上げきれなかつたという点があげられる。私自身が楽しい雰囲気を作るための声出しに慣れていなかったため、先輩の声に続いて声を出していた。それでは自分からその場を盛り上げようとしているとはいえ、結果として子どもたちに楽しい雰囲気を作ってあげることができていなかった。場の雰囲気を盛り上げるのは私たちの役目であるため、子どもたちが楽しく安全に活動し、学ぶためにもそのような雰囲気づくりは大切だと感じた。

今回、初めて子どもと接する活動に参加して、企画をやり遂げることの難しさを感じるとともに多くの改善点も見つかった。初めての活動で戸惑うことも多かったが、今後の活動で改善していくことができると感じた。次回からは、スケジュールに書かれていることだけを行うのではなく、周りの状況や子どもをよく見て、臨機応変に行動したい。今回の活動を参考に、これから子どもと関わる活動に積極的に参加したい。

子どもとのかかわりから学んだこと

幼年教育専修1回生 横大路 七星

令和元年11月17日、奈良教育大学で第3回集まれ！ESD子ども広場が行われた。

本イベントで学んだことは3つある。1つ目に子どもを楽しませることの難しさや面白さ、2つ目に子どもの安全管理や健康管理の大切さ、3つ目に準備の必要性である。

まず1つ目に、子どもを楽しませることの難しさについてである。パネルシアターやポシエット作りなどのすべての活動に対して、子どもたちは想像以上の反応を示してくれた。そのことを嬉しく思うと同時に、子どもはさまざまなことで楽しむことができるのだと感じた。しかし、幼児たちの活動班のリーダーとして参加していた私は、小学生とはあまり深く関わる事が出来なかった。



幼児との交流

すべての子どもに対して、平等に接したいと考えていたのにも関わらず、小学生を楽しませる活動にあまり携わることが出来なかった点が今回の反省点である。

次に、2つ目の子どもの安全管理や健康管理の大切さである。途中で体調が悪化して帰ってしまった子はいたが、全員が怪我をすることなく活動を終えることができた点は、本当に良かったと思う。途中で帰ってしまった子は、朝から体調が悪いと言って

いたため気をつけてはいたが、もう少し早い段階から椅子に座って活動に参加させてあげるなど、ほかの方法で楽しませてあげることが出来れば良かったと思った。幼い子どもは体調の変化を言葉にすることが難しいため、大人が注意して見守る必要があるのだと学んだ。

最後に3つ目の準備の必要性についてである。私は幼稚園児班のメンバーのように、準備の段階から携わることが出来なかった。しかしリーダーとして幼児の活動班に入らせてもらったことで、活動の進め方を考えたり何度も練習したりして、たくさんの時間を掛けて作られたものなのだということが伝わってきた。また事前準備のときに、何度もプレを繰り返すことを通してみんなで意見を出し合うという経験を今までしたことがなかったため、あまり自分の意見を出すことはできなかった。しかし、意見を持つということは本当に大切なことなのだということがわかり、良い経験となった。今までは「生徒」という立場で、さまざまな活動を受ける側だったが、これからは「教師」という立場で子どもたちに教える側になるのだと改めて感じ、子どもたちの活動を充実させるためには、事前準備が大切なのだということがわかった。



ポシエット作りの様子

以上、3つのことについて主に学んだ。ここでの反省点や改善点をしっかりと受け止め、教育実習などの教育現場に出た際に生かしていきたいと思う。

2019 年度 近畿 ESD コンソーシアム

第3回集まれ！ESD 子ども広場 活動報告書

2020 年 3 月 31 日

近畿 ESD コンソーシアム 国立大学法人 奈良教育大学
地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学
教育研究支援課

E-mail k-soumu@nara-edu.ac.jp

Tel 0742-27-9367

Fax 0742-27-9147